

探偵
文庫

化^か

學^{がく}
子

の
犯^{はん}

罪^{ざい}

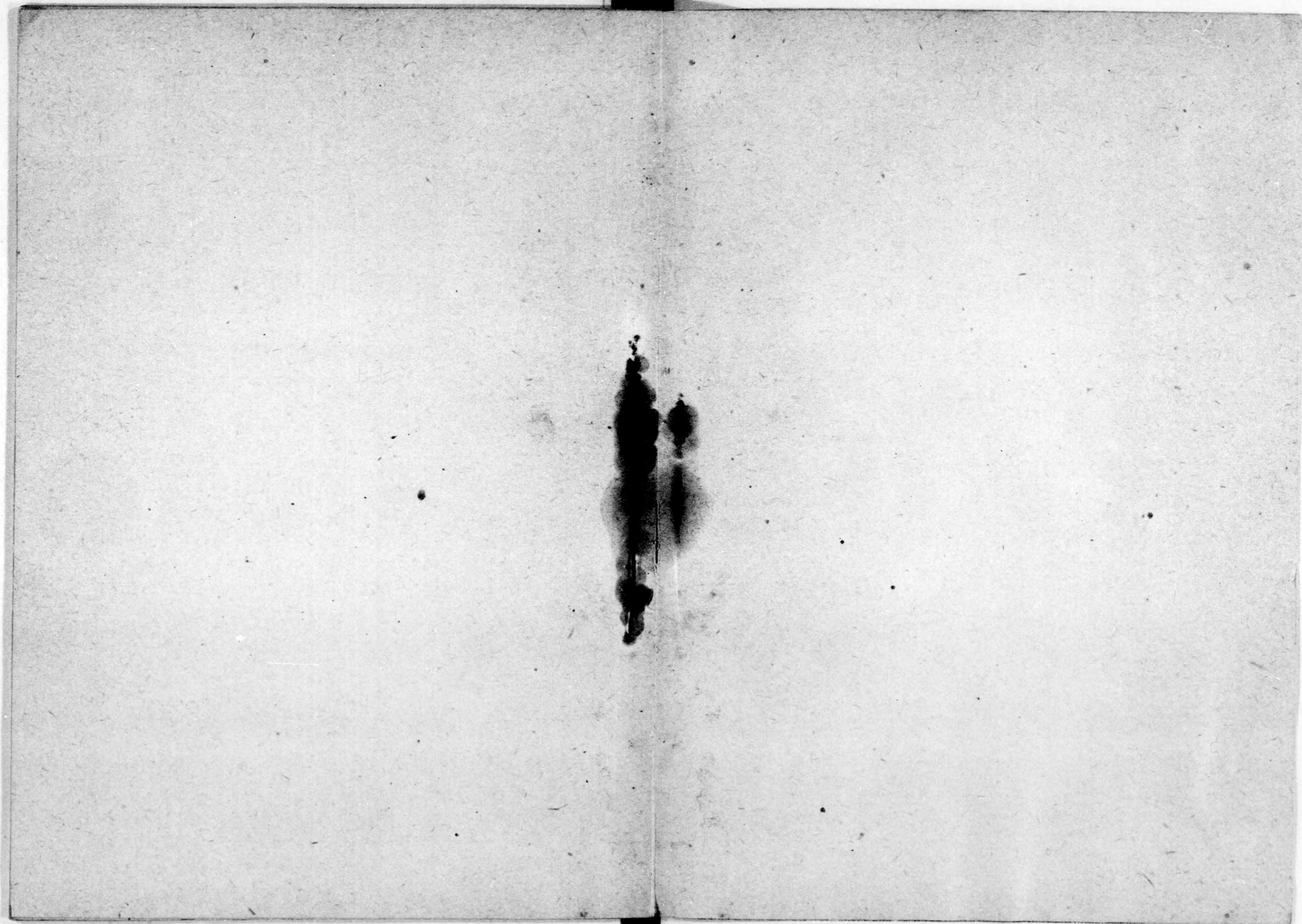


特

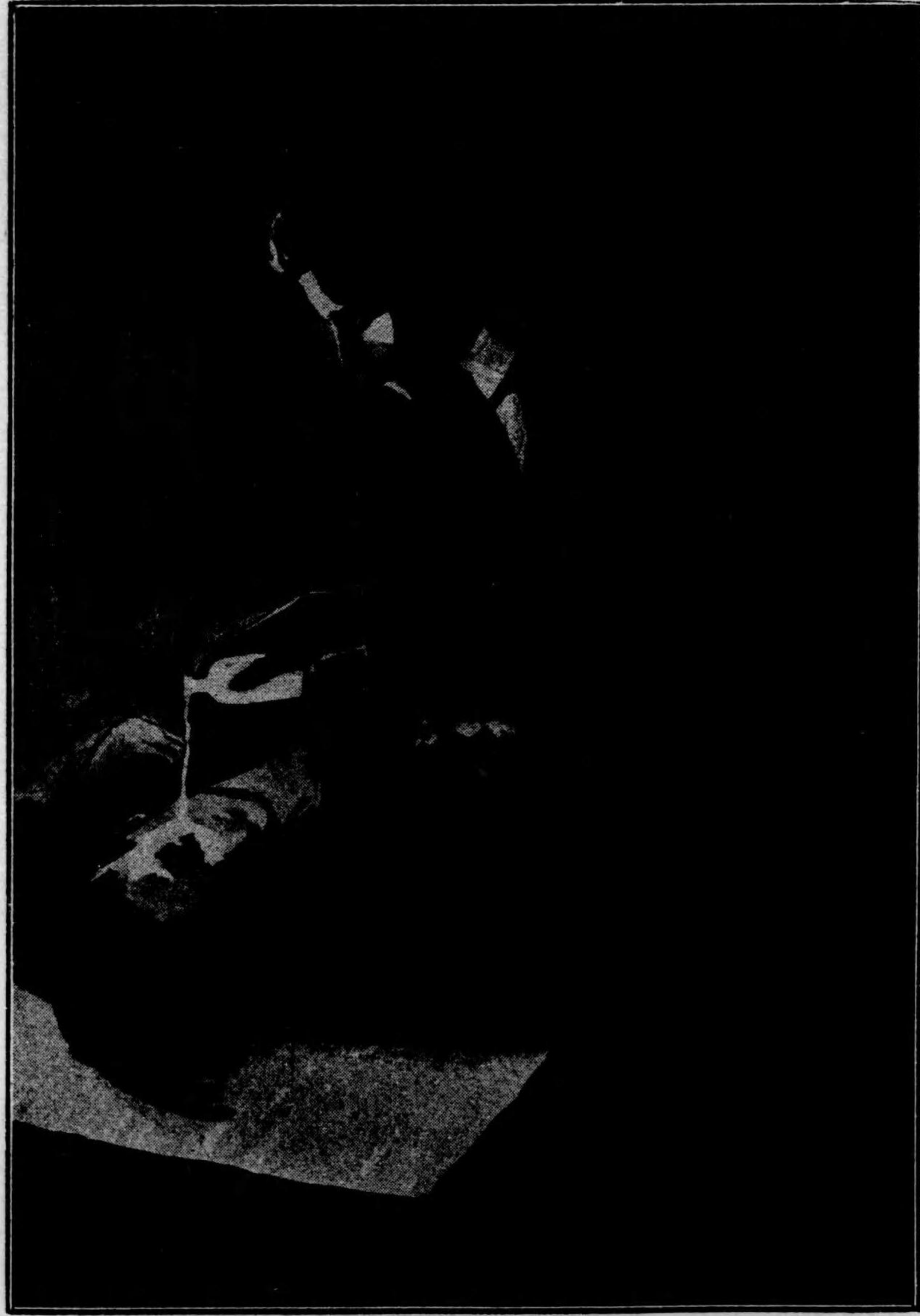


始



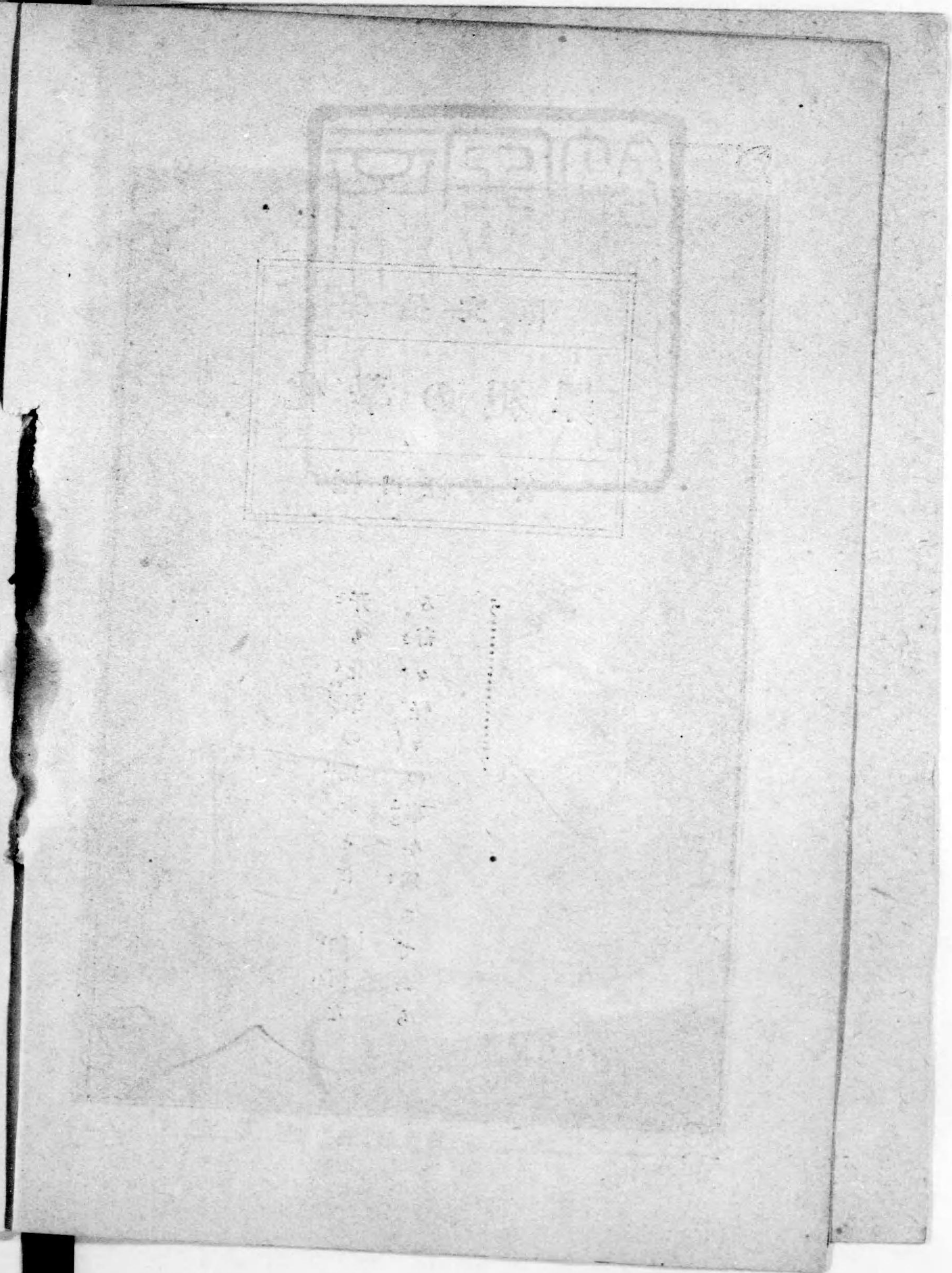


特101
334



化學の犯罪

!! いしる怖^そは能^き効^きの薬^{くすり}



探偵 文庫 化學の犯罪目次

次	目	
1	忽ちの間二十四五萬、	オヤもう十一時。玄關拂ひでもあるまい……………一
2	伯林式の高襟、	マア大變よ。ナニ彼の女中がッ……………八
3	一大椿事、	残念だつたな。奥さん喰ひ逃げだなんて……………一六
4	阿母さんが殺された、	アレツ奥様が。忠さん、人殺……………二
5	盗賊で	兇行の場所は何處だ。容易ならざる犯罪……………二六

6 紛失金額は、
總計六千七百圓、俾急げ……… 二五

7 それですと警部は叫んだ、
フム是れは正直相だ。探偵は俾夫に飛び付いた……… 二六

8 デタバタするかつ、
忠吉はハラ／＼涙を流した。何も彼もお天道様が……… 二七

9 彼の名譽探偵か、
エツ化學に、勿論男です……… 二八

10 何かお手掛りが、
占めたツ……。同一の女の足跟……… 二九

11 エツ俾夫を拘引、
猫冠りが幾らも。圖々しい奴だ……… 三〇

12 似て居ましたかつ、
エツ印度ツ。馬鹿なツ……… 三〇

13 夢ぢやない事實、
叔父さんは反對黨。怖い話ばかりして……… 三九

14 惨殺されたのは誰？、
法律上道徳上の罪を犯して。有りましたく……… 四八

15 飛んだ兄さんだ、
エツ兒鳥を姦通。成程違いますな……… 一〇七

16 人間が煙の様に消える藥、
アル／＼ツ身慄ひ。着類の間から一葉の寫眞……… 一一五

17 今度は貴下の番、
怖ろしい藥をかけられるのは。失望や嫉妬などが……… 一二四

18 不思議な寫眞、

探偵はアツき驚ろいた。記した文字までが同一……………二三

19 床の下に這ひ込んだ男、

亭主殺しが出来たもんだ。彼れを生かして置いちや二四二

20 青い塚から移した液體、

思はず立ちすくんだ。塚を眺めてニツコリ……………一四七

21 窓から忍んだ男女、

ピストルの引金を引いた時、貴下の生命を奪りに来た一五

22 妹と知らずに殺しました、

善の結果は善、惡の結果は惡。惡の榮えた例は無いからな一六〇

探偵 文庫 化學の犯罪目次 終

探偵 文庫 化學の犯罪

樋口紅陽 著

「一」 忽ちの間に十四五萬 △オヤもう十一時！……………▽
△玄關拂ひでもあるまい▽

本郷の團子坂と云へば、以前は菊で有名なものであつたが、
今では菊のキの字も見なれない、而し以前が以前であつたから
諸君は必ず團子坂の名を知つて居であらう、否や忘れぬに違ひ
ないと思ふ。近頃電車通りになると云ふので、道路が廣くなつ
た、根津の通りを一直線に來ると四ツ角がある右に折れるのは

谷中三崎の方へ行く道で、菊のあつた頃には、非常に盛つた菊見煎餅の店なども、不相變菊見煎餅の看板を掲げて其の通りにある。左りに肉屋とお茶屋の間を曲ると、間もなく爪先上りの坂になる。是れが即ち團子坂である。坂を上り切つて右に折れた處は、林町で兩側はズラリと塀で圍まれた立派な邸ばかりである。其の右側の方に、一本の大きな櫻の枝が、塀の内から往來の上に、ニユツとのさばり出て居る一構がある。一抱もあらふと云ふ様な丸木門で、表札には和田義郎と記してある。主人と云ふのは、以前は官途に在つた人だが、父から譲られた僅かばかりの財産を基に、乗るか反るかかの相場に手を出したが、幸

運にもトン／＼拍子に儲けるので、月給取りなんかは、逆も馬鹿臭くて行つて居られないと、斷然官途を辭して、相場ばかりやつてゐたが、それから面白い様に儲かつて、忽ちのうちに十四五萬の財産家に成り済みました。仍で神田の小さな家屋敷は賣り拂つて今の邸を買ひ入れて引越した。此處は舊松山子爵の仕居であつたのだから、仲々庭園も廣いし、佛蘭西式の洋館と純日本式の二通りの家が、一見森かとも怪しまれる様な植込みの中に建てられて居る。此處に越した翌年、恰度今から五年前に夫人の道子は夫とそれから、十一になる長男の潔と、八歳になる春子と云ふ、可愛盛りの二人の子を残し三十二で肋膜炎を病

み遂に死なつて了つた。其の死なる時に、以後は一切相場を廢めて下さいと云ふ、呉れくもの遺言であつたから、斷然相場を廢めて、金利で有福に暮して居たが、其の時は未だ義郎は四十一と云ふ年齢であつたから、閨淋しさを感せずには居られなかつた、折々新橋邊りに遊びに往つて居たが、道子が死んで一週忌を経たない間に、新橋の吉野家の綾香と云ふ藝妓を退籍し後添へとして引き入れて了つた。

綾香は其時二十歳と云ふのだから、義郎から見ると、全然娘見たいだ、而し世間で藝妓上りと云へば、頭から、何だい藝妓上りか、藝妓上りぢや碌な奴ぢやあるまいと、屹度悪いもの、

様に云ひ貶すが、綾香は先妻の忘れ遺身の、潔や春子を非常に大切に可愛がるし、それに酔いも甘いも舐め盡して居る、所謂苦勞人で、金の切れ目なども宜いから、下女下男は勿論、出入りの商人や何かでも、奥様々々と云つて、誰れ一人賞めないものはなかつた。それで義郎も綾子々々と云つて、先妻より以上に可愛がつて居た、

今日しも主人の義郎は、所用があつて品川まで出掛けるし、潔と春子は學校に行つて、一室で綾香の綾子は、其日の新聞を讀んで居たが、最早新聞も見盡したと云ふ風に投げ出して、宜い氣持に秋の陽に照された落葉の重なつた庭を見て居るが、や

がて大きなボン／＼時計が、玄關の方から、聞とした幾つかの室を越えて、響ひて来るのを、口のうちに數へて居たが、綾「オヤもう十一時……!!、どうしたんだらう、手紙が着かない筈はないが、留守だつたのか知ら……?。」

人待ち面して獨語言た。處へ靜かに襖を開けて。敷居越しに手を突いたのは、折々出入商人などには、綾子と間違へる程の美人で、而かも其の姿勢までが何處となく似て居る、上女中の波江であつた。

波「アノ奥様へ、只今兒島様が御見へになりましたが、如何致しませう……?。」

綾「留守だと云ふ事を申上げたかへ……。」

波「ハイ、且那樣は御留守でムいますかと申しましたら、では久しく御無沙汰をして居るから、一寸奥さんにだけでもお目にかゝり度いと有仰つて居らつしやいますか……。」

綾「そうかへ、他の方ぢやなし、且那樣の御親友でゐらつしやるから、玄關拂ひでもあるまいオホ、西洋館の方にお通し申して置きよ……。」

綾子は戯談交りに、優しく斯う云つた。

波「畏まりました……。」

波江はしどやかに襖を閉めて、玄關の方に行つた。

「二」伯林式の高襟……

△マア大變よ……▽
△ナニ波の女中がツ……▽

波注が行くと、綾子は化粧室に這入り、媚かしいまでにお粧りをして、スリッパを軽く足に突かけ、洋館の應接室に來た。

綾「マア随分遅いぢやありませんか……。」

扉を締めた綾子は、相手の男をたしなめる様にジロリと見て如何なる雄高傑でも、惱殺せずんば止まずと云ふ様に、ニツコと笑つた。

應接室に待つて居たのは、久しく獨逸に行つて居つて、去年の暮に印度の方を廻つて歸朝した兒島健一と云ふ主人の義郎と

は友人の間柄なのである。友人とは云へ、年配は兒島の方が十歳も年下の上に本場を踏んだ伯林式の高襟だから、一寸見には息子とでも云へる位だ。色の白い、黒い八字髭美しく、鼻眼鏡をかけてゐる。

兒「否や恐れ入りました……フ、、。」

綾「恐れ入りましたフ、、ぢやありませんよ、大切な瀬戸際ぢやありませんか、妾の氣も知らないで……。」

兒「實は其の一寸來客があつたもんだから……。」

綾「へんごんなお客様だか、昨夜のうちから來て、今朝お太陽が高く昇るまで、床の中に潜つて居る様なお客様でせうよう

綾子はツンとして見せる。

見「馬鹿なツ……。」

兒島は怒りもしない、笑つて居る。

綾 貴郎は笑ひ事か知れませんが、妾は些つとも嬉しくありませんよ……。」

兒「イヨツお怒り遊ばしましたかね、女子と小人養ひ難しだね……。」

綾「何ですつて、養ひ難し、どうせそうでせうよ、是れまで妾は貴郎には二三萬の金を注ぎ込みましたからね……。」

見「それでどうしたと云ふのだ。」

綾「アラ此の人は本氣になつてるよ、呆れつちまうね……鳥渡貴郎を齷弄つて見たのよオホ、、。」

見「何吾輩を齷弄う……。」

綾「シツ……。」

綾子は急に手を以て制した、處へ靜かに扉を開けて、波江が紅葉を持って來たが、兒島と面を見合して、急に眼を反して出て行つた。綾子は扉の鍵穴から外を覗いて居たが、先づ安心と云ふ様な面付で、

綾「ねえ貴郎……。」

兒島と擦れ／＼になる様に椅子を進めた。

兒「何だい……。」

綾「アラ未だ怒つてらつしやるの……？ 妾厭……!!。」

甘へる様に、兒島の手を取つて二三度打ち振つた。

兒「フ、誰れが怒つてる……？」

綾「そう……？ それで妾も安心したわ、何時まで斯うしてたつ

て詰らないわねえ……。」

兒「詰らなかつたら廢めるまでさ……。」

綾「アラ又あんな曲つた事を……そうぢやないのよ、何時までも妾此邸に居て、厭な人の機嫌を取つてるのが否だつて云ふん

ですよ……。」

兒「永い間ぢやないぢやないか、二人が贅澤に暮して行けるだけの金を引つ張り出しさへすりや、何時でも夫婦になると云つて居るぢやないか。」

綾「でも是れまでだつて、随分無理な事もして上げたんだけど、皆な藝妓買ひや相場なんかして、直ぐに一文なしのカンチヨコライになんだもの、妾些ども張り合ひがないぢやありませんか、馬鹿々々しい、貴郎一人は宜い思ひをして、妾は厭な人の機嫌氣樓ばかりか、可愛くもない子供まで可愛がる様に見せかけねばならないし……眞箇に詰りやしないわ……。」

「ママアそう苦世々々せすに、金を引張り出す工面でもあるさ
何と云つても金が先だからね……。」

綾子は不満ささうな面をして黙つて居た。

「オ、そう〜今日は聞いて見やうと思つて居たが、お前の

叔母さんや妹の行衛は分らんのかね……。」

「綾」妾も稼業をして居る時から、随分心にかけて居ただけぞ
何處に行つたんだか、些とも分らないの……。」

「兒」そうかね、妹は何か云つたね。」

「綾」藤枝〜と云つてましたが、何しろ妹が六つで、妾が八つ
の時に分れた限りなんだから、途中で會つたつて、名乗り會い

でもしなきや分りやしませんわ……。」

此の時扉の外に、何だか落ちた様な音がしたから、二人は急
に離れたが、何と無人が居る様な氣合がするから、互ひに驚い
た様な眼を見交して居たが、綾子はソツと椅子から離れ、扉を
開けた時に、上女中の波江の姿が、木立の中にチラと隠れた。

「綾」ママ大變よ……。」

「兒」どうした……歸つたのか……？」

「綾」否え、波江の奴妾等の話を立ち聞きして居たらしいわ……
ママどうしませうね……。」

「兒」ナニ彼の女中がつ……。」

【三】

一大椿事……

△残念だったな……▽
△奥さん喰ひ逃げだなんて▽

今にも夕餉を済ますと、間もなく潔と春子は寝て了つた。

義「最早寝たのかね……。」

と、傍の綾子を顧たのは、主人の義郎であつた。

綾「エウ最早夢でも見て居りませう……。」

義「ハ、ハ、ハ、悪戯が烈しいから勞れると見へる……。」

義即は夕刊を取り上げた。

綾「ア、今日兒島さんが入來つしやりましたよ……。」

義「何……？ 兒島が……？ 珍らしいぢやないか……。」

綾「貴郎がお留守でしたものだから大變張り合ひのない風でム
いました。」

義「ハ、ハ、ハ、そうか、何か要事でもある風だったか……。」

綾「否へ、別段御用はない様でムいました、只だ久しく無沙汰
をしてゐたからと云つてお見へになりました。」

義「そうか、残念だったな、彼の男は彼れで中々頼母しい男だ
……大體人間が正直だからな……。」

綾「眞箇に善い方ですわねえ……。」

義「永く居たのか……。」

綾「そうでムいますね、十一時頃から入來しやいましたから、

中食を差上げましたら、奥さん喰ひ逃げだなんて御戯談を有仰つて、直きにお歸りになりました」

義「アハ、、、そうか、近いうちに來るやうな事は云つてゐなかつたかね」

綾「何れ又明日伺いませうと云つてゐらつしやいました。」

義「そうか、否や彼の男は彼れで感心だ、獨逸から歸つて、何をすると云ふでもなく彼してゐるが、大概のものならば、以前役所に居た時の友人だなんて云ふと、金でも貸して呉れと云ふて來るのだが、彼の男ばかりは、遂ひ其麼事を云つて來た事はないからな……。」

綾「そうでムいますねえ……。」

話は是れで暫く途切れた。義郎は新聞の雜報などを見て居たが、

義「幾時だね。」

綾「左様でムいますね、先刻十時打ちました。」

義「ナ二十時……？寝るとしやう……。」

綾「お寝みなさいまし……。」

主人を寢かした綾子は、上女中の波江の居間に遣つて來た。

綾「オヤ波江、お前何を考へてるんだね。」

波「アラ奥様でムいますか、御用でムいましたら、お呼び下さ

りますれば……。」

綾「否え別に用でもないんだけど、妾し何だか今夜は、子供等ばかりでは淋しいから、お前も妾の部屋に来て寝んでお呉れね……。」

波「それは奥様勿體なうムいます……。」

綾「何が勿體ない事があるものかね、さあ来てお呉れ……。」

波江は綾子の部屋に、自分の蒲團を敷ひて、隅の方に寝る、綾子は潔と春子と三人枕を列べて寝た。初めのうちは、波江は主人の部屋に寝て、襟つたい様な氣でもしたものが、彼方に寝返り、此方に寝返りして居たが、間もなく波江も眠つて了つて

戶外では櫓の梢が、折々の風に戦いで、戀猫がけたたましく泣いて去つた後は、更らに一層の寂寥に入つて了つた。

此の平和のうちに寝に就いた和田邸には、如何なる人が此の平和を攪亂したか、翌朝になつて見ると、實に一大椿事が起つて居たのである。一大事件とは何か……?」

「四」阿母さんが殺された……

△アレツ奥様が……▽
△忠さん〜人殺▽

只だ一息に、グツスリ寝込んだ潔と春子が、翌朝の七時前になると、死んど申合はした様に眼を覺して、潔「なんだい春ちゃん、なんて眠してるの……?。」

春「兄さんだつて變な眼よ……。」

深「オヤツ……。」

春「ナアニ……?。」

深「阿母さんが……。」

春「アレツ……。」

二人は寢卷の儘、遽しく寢所を飛び出して、廊下に出て、

春「誰れか来てお呉れよつ……。」

春子はオン／＼泣き出した。深はバタ／＼父の寢室に飛び込んで、

深「阿父さん大變ですく。」

頓狂な聲に眼を覺した父の義郎、

義「ア、……。」

と大きな欠呻をして、

春「何だ五月蠅……。」

深「阿父さん大變です、阿母さんが……。」

義「ナニ阿母さんが大變とは……お腹でも痛むと云ふのか……。」

深「そんな事ぢやありません」

義「ちやごうしたと云ふのだ」

枕許の煙草盆を引寄せやうとした時、

潔「阿父さんが殺されてゐます……。」

此の一語を聞くが否や、引き寄せやうとした、煙草盆を轉覆へし、

義「ナニ殺されたつ……。」

愕然と立ち上つた。處へ春子がオン／＼泣いて来る。夫れ等には眼も呉れず、義郎は綾子の寢室に来て見ると、無慘にも妻の綾子は、何者の手に掛つてか、眼も鼻も分らぬ様に、面を削り取られて横はつてゐる。

義「アツ綾子つ……。」

道がの義郎も轉倒せんばかり、

義「オイ／＼波江は居らんか、波江／＼。」

子供達は室の入り口で泣いて居るが、呼んでも女中の波江は來もしなければ返事もない。義郎は狂氣の如く、

義「波江と云ふに……オイ潔、誰れか呼んで來い……。」

潔が遽て飛んで行つたが、間もなくデビ／＼太つた、下女のお重を連れて來た。

重「且那樣何を御用でムいますか。」

義「何だ馬鹿つ、主人が斯んな目に遭つてゐるのを、知らんと云ふ奴があるか。」

重「アレツ奥さまが……。」

「何をグル／＼廻つて居るのだ、波江は居らんか波江は……。」

重「未だ今朝から姿を見かけませんが……。」

義「同じ家に居て、姿を見ないと云ふ間抜けがあるか……忠吉はどうした。」

重「忠さんは御門前を箒いて居ます。」

義「其處處を箒く段か、其處の交番でも宜いから、直ぐに知らして来るやうに言へ……。」

「それが何時なら、是れだけの叱言を喰へば、佛頂面をするのだが、眼前稜子の惨死せる様を見て、氣もオロ／＼して居るか

ら、面を膨らす餘裕なごがない。大きな臀を打ち振つて、ドツタンバツタン廊下を駈けて行つて、

重「忠さん／＼人殺しつ……。」

忠「何だいお重さん、朝つばらから糞面白くもねえ、人殺しだなんて……。」

重「そうさお前さん、これが面白かつたら大變だよ、奥さまが誰れにか殺されなすつたよ……。」

忠「エツ……。」

重「どうだい、驚いたらう、それだから交番にそう云つて來いつて、且那様が有仰つたよ……。」

忠「アツ其奴ア大變だ……。」

『五』 泥賊ですく……

△兇行の場所は何處だ▽
△容易ならざる犯罪……▽

交番は眼と鼻の間にあるから、斯んな時には好都合だ、抱へ俥夫兼、下男の忠吉が、遠てふためき知らしたので、平常は其處等の使ひ戻りの女中や、子守や犬を翻弄つたり、それでない時は居眼りをしてゐる。ツングリした巡査も、大股に飛んで来た。

巡「オイ……兇行の場所は何處だ。」

忠「へい奥様が殺されました……。」

巡「だから殺された處は何處だと言ふんだ。」

忠「へい奥のお室で……。」

巡査は一方の靴を玄關に、一方の靴は敷臺に跳ね上げて、奥にガチャ〜飛び込んだ。綾子の室の入り口には、潔と春子が突伏して泣いて居る。中には横はつた、綾子の無惨の死體を前に、主人の義郎が悄然として立つて居た。

巡「ヤツどうしました、何者に殺られました。」

義郎は職掌柄にもなく、遞てゝ居る巡査を苦々しくジロリと見て、

義「サア、何者の所爲とも分りません……。」

巡「何ぞ御紛失のものはありませんか。」

實際を言へば、義郎は其麼事を考へる閑はなかつた。今は夫れ等の物質的のものよりも、最愛の妻が、斯かる淺間しい姿になつたのが、痛ましくてならなかつたのである。

義「それは未だ……。」

巡「金庫などに異状は有りませんか……。」

義「或いはあるかも知れませんが、兎に角貴官から本署に通知して貰ひ度い、尙ほ私の方からも急報せましますから……。」

巡「そうですね……。」

巡査が出て往つた後で、

義「不思議だ、實に不思議だ、一滴の血も出てゐないと言ふのは、……。」

斯う獨語と云た後、

義「お重〜」

重「ハイ……。」

義「波は居らんか。」

重「先刻から洋館の方も探しましたが、何處に行つたか、姿が見えませんが、事に依ると情夫の處にでも行つて、寢忘れたのかも知れませんか……。」

義「其麼白痴な事を云つ居る場合か……。」

暫らく首を傾むけて居たが、

義「フウ……或ひは知れんな……。」

何事か思ひ當る如く斯う云つて、電話室へと這入つた。お重は臺所の方も其方除けにして、潔と春子を慰さめ賺して、茶の間の方へ跟れて行つた。

電話室に這入つた義郎は、警視廳に概略を急報せるやう、無人であるから友人の手傳ひを受けやうと、二三の友人にも電話で事變を知らして、直ぐ來て呉れる様に頼んだ。

急報に接して、駒込署は勿論、警視廳よりも、検事局よりも「开は近來容易ならざる犯罪なり。」

と、時を移さず急行して、兇行の有様を臨檢したが、掛り官一同も、綾子が顔面眼も鼻も分らぬ様に、深く抉り取られて居るにも拘はらず、一滴の血痕をも認めないのには、不思議々々と審かつた。

警「何か紛失したものはありませんか。」

と、問を發したのは、敏腕の聞え高き深澤警部である。

義「サアそれは未だ調べて見ません、無暗に私共が調べるよりも、金庫室なども、貴官方と立會で調べたら、或いは犯人の搜索上、手懸りともなる事もあらうと思ひまして」

警「そうですか、ちやお立會しませう……。」

それから一同の立會で、紛失ものはないかと、それ〴〵調べたが、別に失なつたものもなかつたが、最後に金庫室に来て見ると、室の扉は開け放してある。

義「アツ……。」

警「何ですか……?。」

義「金庫室の扉が開いて居ます。」

先づ驚ろきながら、中に這入つて見て、

義「盗賊です〜。」

と叫んだ。

「六」紛失金額は……

△總計六千七百圓△
△俾夫急げ……△

義郎が斯う呷んだのも無理ない事で、列べられた三ツの金庫は、悉く口を開けてゐた。

警「紛失金額は……。」

義「そうですね、一寸お待ち下さい。」

自分の室から帳簿を持つて来て繰つて居たが、

義「A號の現金二千五百圓と、B號の現金千二百圓、C號のが

三千圓、總計六千七百圓です……。」

警「皆な現金ばかりですか」

義「そうです、」

警部は残らず手帖に記した。

警他には何にも紛失しては居ませんか。」

義「そうです、別に何も……。」

是れで紛失品も分明したので、再び一同が綾子の寢室に歸つた時には、其の頃警神廳から、名譽探偵の待遇を受け、世間からは探偵神と云はれて居る、花丸三郎が、様々の機械を取り出して、其の死因を研究して居た。

警「ヤア花丸さん御苦勞ですな……。」

花「否や今朝は何時もなく寢坊をしたものですから、遂ひ遅れ

まして、今俵を飛ばして來ました。

巡查と何かは、敬しく敬禮をした。花丸は、

花「ヤア〜。」

と挨拶をして、義郎が物を云はふとした時には、再び研究に取り掛つたが、其の熱心さは、他の人の居るのも知らない風であつた。種々の事を行つた揚句、道が化學の智識を有した探偵神も腑に落ちぬ様に首を傾けて居たが、

花「貴下ですか御主人は……。」

と、義郎の面をギロリ見上げた。

義「そうです、ごうも御苦勞様で……。」

花「否やそんな事はどうでも宜いですが、どうでせう、此の御夫人の顔面に残つた肉を、母指の頭ばかり下さる事は出来ませんか……。」

警「試験をするんですか。」

と、警部は横槍を入れた。

花「そうです……。」

警「それは無用です、貴下が試験をせずとも、何れ大學に解剖を依頼するし、又死因の如きは、秋鹿醫の診断で分つてゐます。」

花「そうですか、秋鹿さん、貴下の御診断は……。」

秋鹿「云ふ警察醫は、何時でも門外漢の花丸に遣り込められるから、今日こそはと云ふ様な態度で、

秋「私を見る處では、昨夜十時過ぎに夫人は休まれたと云ふから、間もなく絞殺して置いて、今朝掛曉に斯かる慚忍な行爲をしたものと思ひます……。」

花「そして此の慚忍の行爲をするのに、兇器を以て爲たと思ひますか、又は他の或るものを使用したものと思はれますか。」

秋「無論鋭利な兇器です……。」

花「兇器……？ 而し兇器で抉つたとすれば、斯んなに痕が數年前に焼傷をした痕の様になつてゐる理由はありますまい……。」

秋「それはそうですが、慥かに私は……。」

花「兇器と有仰るんですね……。」

秋「そうです……。」

花「ハ、……。」

苦々しげに笑つた。

秋「何が可笑しいです……。」

花「イヤ何でもありません、どうです御主人御承知下さいますか。」

警部も私鹿との問答を聞いて、気が付いて見ると、成る程兇器で扶つた痕にしては可笑しいから、今度は横槍を入れなかつ

た。

義「御試験なさると云ふなら、どうか御遠慮なく……。」

花「そうですか……。」

花丸名譽探偵は、鋭利な小さな刃物をギラりと閃めかすが否や、一塊の肉を切り取つて、素早くそれをニツケル製の密閉器に入れ、いろくいな道具を靴の中に浚ひ込んで、

花「何れ後刻伺いますから、此處は勿論、賊が手を觸れた様な處は其の儘にして置いて下さい……。」

言葉を残して、後をも見ずに、和田邸の門を出て、

花「俾夫急げ……。」

と飛び乗った。

『七』 それですと警部は叫んだ

△フウ是れは正直相だ▽
△探偵は俵夫に飛付いた▽

花丸が其て出つた後では、秋鹿醫が妙な顔をして居た。深澤警部は思ひ出した様に、

警「此の室に休むのは、夫人と子供さん達だけですか……。」
義「そうです……。」

警「では其の夜具は……。」
指さされて、義郎も初めて気が付いた。

義「オヤツ是れは……お重ノー。」

お重はオツ／＼這入つて來た。

義「是れは誰れの夜具だ。」

重「アラ旦那様、是れは波江さんのでムいますよ。」

義「ナニツ波江の……？ ぢや波江の室に行つて見、床が敷いてあるかどうかを……。」

重「畏まりました。」

お重は出て行つたが、間もなく戻つて來て、

重「マアどうしたんでムいませう、波江さんの床もなければ、夜具も彼方にはムいせんが、どうして奥様のお室に……。」

警「子供さんはどうなさいました。」

義「斯う云ふ事に、深く立ち入らせぬ様に、洋館の方に遣つて居ます。」

警「一寸呼んで頂けませんか。」

義「畏まりました、呼びませう……お重そう云つて来い……。」
暫くすると、お重が潔と春子を連れて来た。警部は二人の顔を暫らく見て居たが、

警「此の子供さんは、夫人の實子ですか。」

義「否や、是れ等の爲めには繼母です……。」

警「ア、そうですか、坊ちゃんも嬢ちゃんも、昨夜誰れか來や

しませんでしたか。」

深「僕知らないの……。」

警「嬢ちゃんは……。」

春「あたしも知らないわ。」

と漸と答へた。

警「ア、宜いですが、女中さんどうか坊ちゃんと嬢ちゃんを彼方に……。」

お重が二人を連れて出た後、

警「金庫の鍵は常に誰れが持つて居ました。」

義「それは妻が持つて居ました。」

警「フムして見ると此の賊は他から這入つたものでありませんが、奉公人は何人居りますか。」

義「抱へ俣夫の忠吉に、上女中の波江と、只今此處に來ましたお重と云ふ下働の三人で、忙がしい時は臨時に出入りの者を雇つて居りました。」

警「此の夜具の持主、波江と云のは何處へ行きました……？」

義「サアそれを今朝から探して居りますが、何處に行きましたか、一向分りません。」

警「それですつ……。」

と思はず警部は絶叫した。

義「私も大方そうだろうと思つて居ます……。」

警「其の女中の原籍は……。」

義「それが分りません……。」

警「エ、……。」

警部は呆れた様な面をする。

義「實は其の女中と云ふのは、抱へ俣夫の忠吉と云ふのが、或る晩日暮里の諏訪神社の境内で、首を縊らうとして居るから、いろ／＼譯を聞いて見ると、兩親には死に別れ、一人の姉には生き別れ、身を果敢なで死なうとしてゐたと云ふので、邸に連れ來ましたから、其の儘にして置いたので、實は原籍なども

聞かずに居りました。」

警「フム……。」

小首を傾けて居たが、

警「忠吉と云ふ俵夫は如何しました。」

義「居ります……。」

警「一寸呼んで貰ひたいです。」

義「ハイ……。」

義郎が鉛を押すと、ズツと向ふの方で鈴が鳴つた。間もなく這入つて来たのはお重である。

義「忠吉は居るか……。」

重「ハイ只今お俵の掃除をして居ます……。」

義「一寸呼びな……。」

重「畏まりました。」

出て行くお重の後を見送つて、

警「フム……是れは正直相だ……。」

傍の探偵を顧みて呟いた。探偵は黙つて頷いた。

忠「へい且那樣御用でムいますか……。」

義「ア、一寸……。」

忠「マア眞箇に彼んな宜い奥様を、飛んでもねえ……へい。」
獨語を云ひながら、頭をベコ〜下げて這入つて来た。

忠「へい……。」

警「おい、忠吉と云ふのは貴様か……。」

忠「へい左様で……。」

警「貴様は上女中波江の行衛を知つてゐるだらう……。」

忠「否え一向にへい……。」

此の時警部の脇に居た、満山探偵は、

満「嘘を吐けつ……。」

と云ひ様、突然忠吉に飛び付いた。

「八」

ヂタバタするかつ

△忠吉はハラ／＼涙を流した▽
△何も彼もお天道様が……▽

忠吉はアツ。

と云つて、飛び下らうとしたが、最早其の時は遅かつた。

満「ヂタバタするかつ……。」

グント／＼両手を打ち上げた。

忠「ア痛ツ／＼且那／＼吾儕をどうなさるんで……。」

満「白ばつくれると許さんぞ、貴様と波江がグルになつて、奥

さんを殺し、金庫の金を盗んだらうが……。」

忠「冗……冗談を……。」

満「ケ間しいつ……。」

義「否や夫れは是れまで至つて正直に勤めた者ですから、夫れ

に限つて其麼事はありません……。」

滿「それだから困るです、不常忠實らしく見へるものは、却つて危険です……。」

云ひながら後手に縛り上げた。

忠「旦那吾儕がそんな……。」

滿「五月蠅つ……。」

忠吉の頬迢ど、平手で曲む程擲つた。

忠「ア痛つ、旦那余まり亂暴だ……。」

滿「歩け……。」

忠「だつて旦那……。」

滿「歩かんか……。」

又もやニツ三ツ續け様に擲つた。忠吉はオイ／＼泣きながら歩き出した。

今しも玄關に來ると、お重はそれを見て、

重「マア忠さん……。」

忠「お重さん巳れが奥さんを……。」

滿「黙つて……。」

深「忠吉、お前どうしたんだ。」

春「アレ忠吉が……。」

二人の子供が飛び出して、右左から取り鈍つた。

忠「坊ちやま嬢ちやま……。」

忠吉はハラ／＼と涙を流した。

潔「叔父さん、僕んごこの忠吉は何をしたんです、忠吉はごうしたんです……。」

男の兒だけに、潔は探偵に喰つてかゝつた。

満「坊ちやん、貴方達の知つた事ぢやないです、忠吉は波江と二人で、貴方方の阿母さんを殺して、金を盗んだのです……。」

潔「忠吉と波江が……そんな馬鹿なつ、忠吉は正直ものです、浪江は僕等を可愛がつて呉れました、そんな悪い事はしません、實際したとしても、忠吉と波江がした事なら、僕構ひません……。」

「……。」

満「ハ……坊ちやんは構はなくとも、國の法律と云ふものが許しません……何を泣いとするか、貴様が涙で胡魔化さうとしても

胡魔かされはせんぞ……。」

潔「叔父さん忠吉はそんな……。」

満「オイ君女中さん、子供を其方に……。」

お重に眼で知らせると、

重「サア坊ちやま、嬢ちやま、此方に入らつしやい……。」

無理矢埜に引き戻した。

忠「坊ちやま、嬢ちやま、忠吉は御恩は忘れませんよ……何も

彼もお天道様が知つてらつしやいます……。」

「何を云ふかッ……。」

情容赦もなく、忠吉を門外に引き出した。忠吉は後を顧へつて、

「坊ちやま嬢ちやまだ様なら……。」

ワツと男泣きに泣いた。處へ多くの係官が、主人の義郎に送られて、ゾロ／＼出て来た。父の姿を見た潔は、突然傍に駆け寄つて、

「阿父さん、何故忠吉を遣りました、忠吉は其廢事はしやしません……。」

義「お前達の知つた事ぢやないから黙つておなさい……。」

花「だつて忠吉は……。」

義「マア宜いと云ふに、何も彼もお上で裁いて下さる……否やどうも皆様御苦勞でムいました。」

係官の一同は、或ひは俾、或ひは徒歩で和田邸を去つた。さうして知つたか、早くも多くの彌次馬は、さしにも廣い通りに、立錐の餘地もない程立つて、自動車に乗せられて去つた忠吉の噂などを、

△深川の三人殺しも今のだ相ですよ。」

「正直相な顔をして居りますがね」

「人は見せけに寄らぬもの……か。」
と、浪花節を唸るものもあつた。

『九』 彼の名譽探偵か……

△エツ化学に……▽
△勿論男です……▽

一同を送り出して、子供を慰さめながら、茶の間に戻つた時
遽て、遣つて来たのは兒島であつた。案内も、メンく
上り込んで、

兒「どうした……。」

義「兒島君かつ……。」

兒「ウム直ぐ来やうとする處へ、合憎朝つからの來客で、奥さ

んは……。」

義「見て呉れ、此の通りだ……。」

義郎は前に立つて、兒島を綾子の寢室に案内した。

兒「アツ……。」

兒島は卒倒せんばかりに驚ろいた。

兒「何者の所爲か分つたか……。」

義「ウム、今迄警視廳や何かから来てゐたが、概略見込みが付
いたらしい……。」

兒「見込みが、それは誰だ……。」

義「今朝僕は寢て居たら、子供が大變だ」と云つて来たから

何だと聞いたたら阿母さんが殺されてると云ふから、飛んで来て見ると此の始末だ、そして何時も子供と妻ばかり此の室に寝るのに、波江の床が敷いてあつて、波江が行衛不明なんだ、僕も可怪しいと思つて居たら、其筋でも波江に違ひないと云ふので忠吉を連累者として拘引した。」

兒「エツ忠吉を……。」

義「僕も忠吉に限つて、甚麽事はあるまいと云つたが、遂々拘引した……。」

兒「フム、して見ると何處が怪しい處かあると見へるね、此の死骸は……。」

義「何れ大學で解剖する事になるだらう……。」
處へお重が遣つて来た。

重「且那樣、今朝程の警察の方がお見へになりました。」

義「警察の……?。」

重「ハイ、あの一足先きにお歸りになりました方でムいますよ……。」

義「ア、彼の名譽探偵か……此方にお通し申せ……。」

重「ハイ……。」

お重は退る。

兒「何だ君名譽探偵と云ふのは……。」

義「君知らんのかね、花丸三郎と云つて、警視廳から名譽探偵の待遇を受けた、専門家も及ばぬ化學に精通して居る探偵なんだ。」

兒「エツ化學に……。」

兒島は尠からず驚ろいた風であつたが、義郎は一向頓着しない。

義「ウフ、此の探偵が斯だと見込みを付けたら最後、十中の十まで見込みは外れんと云ふ事は妻の面の肉刃物や何かで抉つたんぢないと云つて、先刻肉を一指持つて歸つたが、今來たら試験の結果が分るだらう……。」

兒「へエ……。」

義「外の探偵と違つて、學理上から推して判断を下すんだからね。」

其處にツカ／＼這入つて來たのは花丸三郎だ。

花「ヤアどうも先刻は……。」

義「どう致しまして、御苦勞様です、御試験の結果は……。」

花丸は何か云はふとしたが、兒島の面をジロリと見て、急に口をつぐんだ、それを察してか、

義「此處に居るのは、私の親友で、昨日も私の留守に訪ねて呉れまして、妻と世間話しをして歸つたが、全然夢の様だと、今

其の話をして居りました、もう内輪の者も同じですから、ごうか御遠慮なく……。」

兒「私は和田の友人で、兒島健一と云ふものです、ごうか以後お見知り置きを願います。」

叮嚀に頭を下げた。

花「是れは申し後れました、私は花丸三郎と云ふ者です以後ごうか……。」

是れも頭を下げたが、面を上げた途端に、兩眼はギロりと光つた。兒島は眼を脇に反らした。

義「先刻は彼云つて争ひましたが、試験の結果、矢張秋鹿醫師

の云ふ通り、絞め殺した後に、鋭利な刃物で快つたものに相違ありません……。」

義「そうですね……。」

義郎は何となく張合ひの抜けた様な面。

兒「兇行者は男の御見込みですか、それとも女ですか……。」

兒島は横合から斯う尋ねた。

花「勿論男です……。」

云ひつゝ、花丸探偵は、靴の中から、例のいろ／＼な機械を取り出して、顕微鏡の様なもので、足跟や何かを仔細に調べながら、其の足跟を傳はつて、裏の方に出ると、寢室から三ツ目の

窓で消えて居るから、今度は外に出て、頻りに足跟を調べて居たが、其處には女の跣足の足跟の他に、男の靴跟を見出した。處が三足ばかりで、女は空氣草履を穿いたらしい。

花「濟みませんが、奥さんの寢室から、其の窓まで何歩ありますか、一寸歩いて見て下さいませんか。」

花丸は窓際に立つて、不思議相に見て居た、義郎と兒島を見遣つた。

義「畏まりました。」

兒「何歩あるだろう……?」

二人は一二三四と數へて去つた、花丸はポケットとから、小さ

な尺度を取り出して女の跣足の跟を當て、一々手帖に認めた。

義「三十歩ですね……。」

花丸は手帖と尺度を匿して、

花「その位ですか、も些と小刻みに、悠り歩いて見て下さい……。」

二人は上官の命令にでも服従する様に、

義「ハイ……。」

と云つて、又歩き出した。

「110」何かお手掛りが……

△占めたつ……
△同一の女の足跟▽

二人が歩き出すが否や、花丸探偵は、再び尺度と手帖を取出して、男の靴跟と、今度は女の空氣草履の跟の太さを量つて了つた。

義「三十六です……。」

花「そうですか……。」

花丸は尙ほ仔細に調べて居たが、女の下駄の跟と、男の靴の跟は大跨に、裏の雜木藪の中に消えたから、更らに藪の中に這入つて見たが、何物も見出せなかつた。

義「何かお手掛りが……。」

花「何も見つかりません……。」

云いつ、素知らぬ体に、靴跟を分らぬ様に踏み躪つた。

重「旦那様、御飯を召し上りませんか。」

義「お客様の仕度をしたか……。」

重「ハイ……。」

義「モシ貴下伺にもありませんが……。」

花「私ですか、私は澤山です……。」

義「そう有仰らすと……。」

兒「如何ですか、折角仕度をした相ですから。」

兒島も横から口を添へたが、

花「イヤ遠慮は致しません、朝飯が遅かつたもんですから、私

にお構ひなく、貴下方はどうぞ……。」

義「そうですか、ちや一寸失禮致します、オイ兒島君ちや失敬して喫ふちやないか……。」

兒「ウムちや失禮します……。」

二人はお重の後から中の室の方へ行つた。二人の姿が見えなくなるが否や、花丸は庭傳ひに玄關に出て、其處に脱いであつた、兒島の左の方の靴を取り上げて、ポケットから以前の尺を取り出して、太さを量りながら、手帖に記したものと照し合はしてゐたが、

花「占めたつ……。」

と云はうとしたが、急に口に手を當てたり、花丸は再び以前の窓から中に這入り、綾子の寢室に遣つて来て、死骸に就いて仔細に調べた」

義「ヤア失禮しました。」

兒「ごうも失敬しました。」

花「ごう致しまして……。」

兒島がマニラの葉巻に火を付けやうとすると、

花「アツ、此の室では、暫らく煙草は御断りします……。」

兒「そうですか、禁喫煙ですかハ、ハ、ハ、ハ。」

義郎も寂しく笑つた。花丸は隅の方に敷き放しになつて居る

の入り口に 窓下で見た女の足跟と、殆んど同一のものを見出した。

花「平常奥さんは此の室にお入来になつてゐましたか……。」

義「主人が女中室に行くど、女中達は厭がるものだと云つて、決して足踏をしませんでした……。」

花「フム……手廻り道具などを調べて見たいが、差支へはありますまいね。」

義「どうぞ……。」

花丸は押入れの中や、敷島の箱に入れた、化粧道具や、其他風呂敷包みの中の、褌や何かまで調べた。

「——」 エツ車夫を拘引……

△緋冠りが幾らも……▽
△斷々しい奴だ……▽

花「最う宜いです……。」

再び以前の室に戻つた。

義「警神廳の方では、上女中の波江と、俥夫の忠吉だと云ふ御見込みで、波江の人相をお聞きになつて、忠吉を拘引されましてが……。」

花「エツ傳夫を拘引……。」

義「彼の忠吉ばかりは、至つて正直に働いて居ましたから眞逆そんな事はあるまいと思ひますが、貴下のお見込みは……。」

花丸は何事か思ひ返す如く、

花「いや誰れの見込みも同じなものですな……。」

義「して見ますと、矢張波江と……。」

花「そうですね、忠吉の二人です……。」

義「而し忠吉は……。」

花「御主人、世の中には正直らしく、親切らしく見せかけて居て、敵對行爲をして居る猫冠りが幾らもありますからな、人を見たら泥棒と思へ、火を見たら火事と思へとは能く云つた言葉です……!!」

斯う云つて花丸は、兒島の面をギロリ、

兒「そうですね、一体和田君は人を信じ過ぎるよ……。」

義「そうかなア……。」

花「イヤどうもお邪魔致しました、いづれまた……。」

義「オヤ最早お歸りですか、どうも御苦勞様でした……。」

兒「御手数を煩らはして恐れ入りました……。」

花「どう致しまして……。」

愛想よく斯う云つて、二人に送られて玄關に出た。

花「アツそう、兒島さん、貴下は昨日奥さんとお會いになった相ですが、別に變つた様子も見えませんでしたか。」

兒「エ、別に……。」

花「何時頃お入來でした。」

兒「そうですね、十一時頃でした。」

花「お歸りは……。」

兒「十二時ちよつと過ぎだつたと思ひます……。」

花「そうですね、其の時のお面の色は……。」

兒「面色ですか、そうですね却つて何時もよりも宜い位でした……。」

花「そうですね、ちや晝のうちに毒を盛られたと云ふ譯でもありません。」

花「イヤそれは絶対にないでせう……。」

花「ヤアどうも失禮しました。」

和田郎を出た花丸は、

花「圖々しい奴だ……。」

と獨語ちて、團子坂上から俥に乗つて、警視廳に行つて見ると、満山探偵は、俥夫の忠吉を脅しつ賺しつしてゐた。

花丸探偵は、犯人は波江でもなければ、俥夫の忠吉でもない意外な處に在る事を主張したが、警視廳側では、容易にそれに同意せなかつた。

花「宜し、此の上は一日も早く眞の犯人を擧げて見せる、其の時彼悔するな……。」

も心の裡、何故か例の夫人の肉の試験の結果は、警視廳でも語らなかつた。それは大學が如何なる診断を爲すか、と云ふ心があつたからである。

「一二」 似て居ましたかつ……

△エツ印度……▽
△馬鹿なつ……▽

翌日は早速綾子の死骸を解剖に附したが、何もので斯く巧みに扶つたかは、追がの大學でも解らなかつた、是れを聞いた花丸探偵は、獨り會心の笑を洩した。

此の兇行があつて三日目、花丸は再び林町和田邸を訪れた。

花「一昨日は失禮しました。」

義「どう致しまして、いろいろ御骨折りムいました……。」

花「御主人、一昨日は少々都合があつて、警視廳側と同意見の様に云ひましたが、實は私の意見は大いに異なつてゐるのです。」

義「御意見と申しますと、犯人の見込みがですか……。」

花「そうです……。」

義「而し忠吉は自首したから、今は波江の捕縛を待つばかりだと云ふではありませんか……。」

花「それが大いな間違ひです、忠吉の自首は、満山や其の他から脅迫された結果、偽りの自首です……。」

義「ちや忠吉は冤罪に陥てるのですか……。」

花「そうです……。」

義「それがどうしてお分りですか……。」

花「今に分ります……就ては今日は些と改めていろくお尋ねしたい事があつて参りましたが、一々お答へ下さいますか」

義「私の存じて居ます事だけは……。」

花「そうですか、或ひはお尋ねする事が、立ち入り過ぎる様な傾きがあるかも知れませんが……。」

義「決して構ひません……。」

花「ちや伺ひますが、今回惨殺された奥さんと云ふのは、新橋

の藝妓だつたと云ふ事を聞きましたが事實ですか……。」

義「そうです……。」

花「何時御夫婦になられました。」

義「そうですね、今から五年前でした。」

花「では子供さんは……。」

義「二人共先妻の子です……。」

花「子供さん方に對する愛情はごうでした。」

義「實子の様に可愛がつて居りましたから、一昨日來て居りました、兒鳥などは大變賞めて居りました……。」

花「九は何故か顔笑んだ。」

花「貴下に對しては如何でした。」

義「それは子供にすらそれですから、ごうか御推察を願ひます……。」

花「貴下と奥さんは、何故同衾なさらなかつたのです……。」

義「それは妻が身體の工合が悪いと申しますから……。」

花「それは何時頃からです……。」

義「そうですね、今年の四月頃からでした。」

花「それから奥さんが、貴下に對する態度が、何處となく違ひはしませんか……。」

義「そうですね……。」

義郎は腕を拱いた。

花「慥かに違つて居なくちやありませんか……。」

義「そう有仰れば、些と變でした。」

花「そうでせう……。」

義「それがどうしました……。」

花「いや自然と分かります……!! 其の前後に於て、貴下のお宅に始終出入りをしたものがありわしまんか……。」

義「そうですね、繁々と云た處で、來たのは一昨日來て居りました、兒島位なものです……。」

花「其の頃貴下は、留守勝ちぢやなかつたですか……。」

義「能く御承知で……些と用がありましたして、毎日の様に晝間は出勝ちでした。」

花「彼の兒島と云ふ人は、貴下とはどんな関係のある人ですか……。」

義「彼れですが、彼れは以前私が官省に居る時の友人です……。」

花「今は何をして居ます……。」

義「久しい間獨逸に行つてゐまして、昨年の暮れに獨逸から印度の方に廻つて歸朝しました……。」

花「エツ印度つ……。」

と花丸は殊更ら力を入れて、問い返すでもなく斯う云つた。

義「兒島がどうかしましたか。」

花「否や今にお分りになります、今度は女中の波江の事ですが原籍は何處ですか。」

義「サアそれです、實は一昨日も警部に聞かれて赤面しましたが、そうです、ね、去年の十月頃でしたか、俣夫の忠吉が、日暮里諏訪神社を通つて居ると、一人の女が首を縊ろうとして居るから、段々様子を尋ねて見ると、何でも生れは千葉縣とかで、小さいときに両親に死に別れ、東京に居る伯母に引取られたが、二ツ違ひの姉は人に呉れて、波江だけが伯母の手に育てられ、

其處此處に奉公して居たが、其の後姉が貫はれた家を尋ねたが分らず、そうこうするうちに伯母にも死なれたので、熟々此の世が厭になつたから、死んで了はふとした處だと云ふので、忠吉が連れて来て其の話をしましたから、其の儘置いて居た様な譯ですから、原籍などは確と分りません……。」

花「では一昨日警部に其の話をしましたか」

義「しました」

花「ハハア……それで忠吉を逆累者と見たな、馬鹿なつ……性質はどうでした。」

義「實に珍らしく柔順い女で、不思議にも、今度惨殺された妻

と、後姿などは間違へる位能く似て居ましたから、出入の商人などが、間違へる事は度々でした。」

花「エツ奥さんに似て居ましたかつ……。」

「一二三」 夢ぢやない事實……

△叔父さんは反對黨▽
△怖い話ばかりして▽

義「私でさい間違へる程でした。」

花「面はどうでした。」

義「他人の空似とでも云ふんですね、眼許なんかは能く似て居ました、或ひは似て居ると思つて見て居た爲めかも知れませんが……。」

花「それが彼等の付け目です。」

義「誰れのですか」

花「否や、お重とか云ふ女中が居ませうか、居たら一寸呼んで呉れませんか。」

義「呼びませう……。」

柱の釘を押すと、見るからに人の善き相なお重が遣つて来た。

重「且那樣御呼びになりましたか……。」

義「用は僕だが、奥さんが彼んな目にお會ひなされた晝間、兒島と云ふ人が来たのを知つてゐるかね……。」

重「私はお臺所の方に居りましたから、何時頃お入來になつた

のか知りませんが、私がどうかした拍子……そろ／＼物置に薪を取りに行きました時に、鳥渡覗いて見ましたら、西洋館の應接間の入口に、波江さんが跣んで居ました、それから間もなく奥さまと兒島様は、御一緒に御飯をお上りになりました。」

花「應接室の入口に波江が跣んで居た……？」

重「ハイ……。」

花「晩の事は些も知らないかね。」

重「ハイ私に朝が早うムいますから、用の濟み次第に勝手に休めと云はれて居ますので、あの晩も九時頃休みましたから、些とも存じません……。」

花「奥さんは坊ちゃんや嬢ちゃんを可愛がつて居たかね。」

重「左様でムいますね、此の春までは大變可愛がつてゐらつしやいましたが、春から何だか急に變な風でムいました……。」

義「其麼様子が見へたら、何故早く云はんか。」

義郎はお重を睨めつけた。

花「否やお待ちなさい、それは云はれるものぢやないです……。」

フム、忠吉と波江の中はどうかだつた……?。」

重「仲と申しますと……。」

花「怪しい關係でもある風ぢやなかつたかね……。」

重「どうしましてそんなことは……。」

花「フムもう宜い、御苦勞だつた、濟まないが、坊ちゃんと嬢ちゃんを一寸……。」

重「アの坊ちやまと……。」

恐る／＼義郎の面を見て、

義「宜いから直ぐ連れて來なさい……!!」

暫らくすると、潔と春子が這入つて來た。

重「もう御用はムいませんか。」

義「お茶を持つてお入來……。」

花「否やどうぞお構ひ下さいますな。」

潔「阿父さんなんです……。」

二人共花丸の面をジロく見てゐる。

義「ウム此の方がお前達に尋ねる事がある相だから、知つてる事は皆な話しなさい。」

潔「警察の人ですか。」

義「そうだ……。」

潔「僕警察の人なんか大嫌いだ。」

義「何故……?」

潔「何故つて、忠吉の様な、彼んな善い正直者を、阿母さんを殺したなんて云つて連れて行つたり、波江のやうに、僕等を阿母さんよりも可愛がつて呉れたものに、泥棒をかつつけたりな

んかして……。」

花「ハ、坊ちゃん、私は警察のものと云つても、忠吉を連れて行つた人達とは反対のものです、忠吉は決して其麼悪い事をする様な人間ぢやない事は、私が能く知つてゐます、だから忠吉を助けて、真箇の泥棒を捕まへるつもりですから、安心なさい。」

花「ぢや叔父さんは反対黨ですか……。」

花「反對黨ハ、そうです〜。」

義郎も頬笑んだ。

花「坊ちゃん、阿母さんは貴方達を可愛がつて居ましたか……」

……』

「僕等を……。」

「潔は父に遠慮するものゝ如く、義郎の面を見た。」

「義阿父さんがゐても構はんから、自分の思つた通り男らしく云ひなさい。」

「潔」ちや云いますよ、去年頃までは可愛がつて居ましたが、どうしたんだか、四月の運動會時分から些とも可愛がらないやうになりました、ねえ春ちゃん……。」

「潔は二ツ年下の、妹の同意を求めた。」

「春」そう……そして何時でも、寝る時になると、怖い話ばかり

してねえ……。」

「愛くるしい眼を、潔の方に向けた。父の義郎は意外と云ふ様な面をした。」

「花」阿母さんが、彼んな目にお會ひになつた晩の事は、些とも知りませんか……。」

「潔」僕知らないよ……。」

「花」嬢ちゃん……。」

「春」わたしも……けご妾あの晩は夢を見ましたわ……。」

「花」どんな夢を御覧になりました……?。」

「春」夢……?それはね阿母さんが波に、指環を遣つたり、着て

居た着物を着せて遣つたりなんかして居た夢なの……。」

潔「アツそれなら僕も見たい!!。」

花「エツ指環を遣つたり、着て居た着物を着せたり……それで
すく夢ぢやないです事實です……。」

義「エツ事實とは……。」

「一四」 惨殺されたのは誰?

△法律上道徳上の罪を犯して▽

△有りましたく……▽

義郎も驚ろきの眼を睜つた。其處にお重が茶を運んで来た。

花「ア、女中さん、坊ちゃん、嬢ちゃんを彼方に……坊ちゃん

嬢ちゃん、忠吉は今に屹度助けて、貴方達を可愛がつた、波も
泥棒でないと云ふ事が立派に分るやうにしてあげますから、決
して人に云つちや不可ませんよ、黙つてゐらつしやい……。」

二人はお重と出て去つた。

義「サアどうぞ……。」

花「ハツ有り難う……。」

花丸は茶を一口啜つた。

義「時に子供の夢が事實と云ふのは……。」

花「それです、貴下は惨殺されたのは奥さんだと思つてゐます
か……。」

義「無論です……綾子でなけりや誰れです……。」

花「坊ちゃんや嬢ちゃんやんの夢では、推察が着きませんか……。」

義「夢で……?」

義「腕を拱いて、暫らく小首を傾けた。」

花「分りませんか……?」

義「分りません……。」

花「ぢや申しませう、而し未だ確かな證據がありませんから、斷然と云ひ切る事は出来ませんが、惨殺されたのは、奥さんではありませんよ。」

義「ぢや誰れです……。」

花「上女中の波江ですよ……。」

義「エツ波江ッ……。」

花「そうです……。」

義「而し面こそ分らなくなつて居りましたが、着て居たものから、指環や枕許に散らばつて居た頭髮の道具まで、慥かに妻のものでした。」

花「それは今の坊ちゃん方の夢で分るぢやありませんか、阿母さんが着てゐた着物を波に着せたり、指環を與つたりして居たと云ふのは、實際そうして居るのを、夢の様に知つて居られたものです。」

義「ちやそうして妻が波を……。」

花「そうです、奥さんが波を惨殺されたのです……。」

義「そんな……。」

花「而し考へて御覧なさい、波江と云ふ女中の所爲とすれば、

何か手廻りの道具が散ばつて居なければなりません、一昨日も

波江の部屋を調べて見ましたが、別段違つて、引掻き廻した風も

見へませんでした。」

義「それは前から準備をして居つたからでせう……。」

花「宜しい、それは貴下の推察に任すとして、貴下は奥さんは

絶対に女中部屋には行かなかつたとお仰いましたね。」

義「そうです……。」

花「處が奥さんの足跟が、波江の部屋について居ましたが、何が爲め行かれたか、貴下には判断が着きますか……。」

義「サアそれは……。」

花「判りますまい……。」

花丸は勝者の様な態度で斯う云つた。

花「御主人……。」

花丸の言葉は急に嚴かになつた。

義「何です……。」

花「私は私の断定を、貴下の前に披歴したいと思ひますが、貴

下は絶対秘密を守る事を誓ひますか。」

義「誓ひます、どうか聞かして下さい……。」

花「ちやお話し致しますが、奥さんは貴下が信じて居られる程貴下に貞節な方ぢやなかつたですぞ。」

義「私の妻が……。」

花「そうです、貴下の奥さんは、貴下には又なき貞節の女に見せかけても、其の裏面には法律上、道德上の罪を犯して居られました……。」

義「妻がそんな……。」

花「それだから貴下は奥さんを買ひ被つて居らつしやると云ふ

のです、以前は兎に角、昨年暮れから、奥さんの心は、貴下から全然離れて居ましたよ。」

義「昨年暮れから……。」

義郎は葉巻の灰を落して、眼を瞑つて考へ込んだ。

花「それは或ひは、貴下の眼には付かなかつたかも知れませんが感じなかつたかも知れませんが……。」

義「一向そんな風も見へませんでしたか。」

花「其處で、其麼事を相手に覺られぬ様な態度や、又は口吻と云ふものは、失禮ですが藝妓上りに限つて巧いものです……昨年暮れに、兒島と云ふ人が、初めて来た時に、貴下も奥

「さんも御一緒に會ひになりましたか……。」

義「そうです、西洋館の一室で、妻と二人で會ひました。」

花「其の時奥さんが、兒島さんの顔を見て、何か驚ろかれた様な風は見へませんでしたか……。」

義「そうですね……。」

再び義郎は、何か強いて思ひ出さうとするものゝ様に、火鉢の灰に眼を落して、凝と考へ込んだ、花丸は義郎の返事や如何にと、片唾を呑んだ、義郎は何か思ひ當つたか、

義「有りました〜。」

と早口に斯う云つた。

「一五」飛んだ兄さんだ……

△エツ兒島と姦通……▽
△成程違いますな……▽

花丸は一膝進めて、

花「ごんな事がありました。」

義「今貴下から爾う云はれて思ひ出しましたが、初めて兒島の面を妻が見た時に、アレツと云つて、さも驚ろいた様な風でした。」

花「兒島と云ふ人は……。」

義「矢張驚ろいた風でしたが、後で妻に聞きました處、死んだ兄に酷似だからと云つて居りました。」

花「フム……お兄さんに似て居るからと云はれましたか……飛んだ兄さんだ。」

と、語尾は寧ろ獨語の様に云つた。

義「それがどうかしましたか。」

花「どうかした處ぢやありません、御主人、驚ろいちや不可ませんよ、貴下の奥さんは、其の兒島と云ふ人と、怖ろしい姦通をして居られましたよ。」

義「エッ兒島と姦通……。」

義郎は仰向様に、倒れんばかりに驚ろいた。

義「それがどうしてお分りです……。」

花「サア未だ確かと云ふまでには行きませんが、何れ近いうちに、事件の真相を明かにしますが、其の時には、私の言葉が虚構でなかつた事が知れます、私の考へでは、初めに會つた時に驚ろいたとすれば、奥さんと其の兒島と云ふ人は、以前に關係があつたもので、圖らずも貴下の家で會見して、再び焼け木杭に火がついたに違ひありません、夫れと共に自然貴下に對する、又は子供さん達に瀧いで居た愛が薄らいたのです、其處に行く子供は正直です……。」

花「否やそれは私は事實として信ずる事は出来ません……。」

義「信じて下さらなかつたら、信じて下さる時を待つまでです。」

花「判りませんね……。」

義「ぢや恐縮ですが、波江の部屋に案内して呉れませんか。」

花「ハイ……。」

義郎は先に立つて、上女中波江の部屋に來た。

義「實は一昨日、貴下ばかりでしたら、足跟などもお目にかけるんでしたが……。」

云ひつゝ、靴の中から、例の顯微を取り出して、入り口の疊を見てゐたが、

義「御覽なさい、此の右の足が奥さんので亂雑に踏まれた足跟が波江のです……。」

義「成る程違いますな。」

花「違ひませう……。」

今度はポケットから、手帳と尺度を取り出して、

花「此處に記した、此の寸法が慘殺された貴下方が奥さんと思つて居られる女の足を、私が秘と量つて置いたものですから、尺度で其の亂雑に踏まれた方の足跟と量り比べて御覽なさい……。」

義郎は手帳と尺度を受取つて、顯微鏡で見ながら、仔細に量つてゐたが、

義「同一ですな……。」

花「ぢや今度は此方の、奥さんの方のと比べて御覽なさい……奥さんの寸法は、是れですく、是れは奥さんの寢室から、三ツ目の室の窓までついてゐて、それから窓下について居た足跟を、一昨日貴下方に足敷を勘定して貰ふ間に、量つて置いたものです……。」

手帖の紙を二三枚めくつて差出した。義郎は以前の様に量つて居たが、

義「同じですな……。」

花「ごうです、未だありますぞ……。」

と押入れを開けると、隅の方に小さな紙箱がある。それを取つ

花丸は、

花「御主人、是れは波江が使つて居た髮油と云ふ事は、茲にあるからは明白でせう……。」

義「そうです……。」

花「此の臭と、此の髪の毛の臭とを、比べて御覽なさい……。」
義郎が受取つて嗅ぎ比べた。

「一六」 人間が烟の様に消へる薬

△アルムツ身懐い……▽
△着類の間から一葉の寫眞▽

義「成る程……同一だ。」

花「ごうです、其髪の毛は、慘殺された女のものを取り取つて

置いたものですが、それでも惨殺されたものは奥さんだと思ひますか……。」

義「……。」

花「私の察する處では、先刻も云いました通り、奥さんと兒島と云ふ人は姦通して居て、兇行のあつた日にも、貴下の留守を幸ひに、奥さんと會見したものだと思ひます……。」

義「而し二月ばかり姿を見せなかつたので、久し振りだと云つて、私を訪ねて來たと云ひますから……。」

花「久しく來なかつたと云ふのも、年の若い、即ち初恋か何かのものならば、到底情熱を抑制切れないから、繁々構曳をする

でせうが、其處は流石に世間を知つた同志の戀ですから、覺られぬ様に態と會はなかつたのです、而し手紙の往復は勿論、或ひはお宅で構曳をしなかつたにしても、何れかで會つて居つたものと思ひます」

義「そう云ふ秘密を持つた二人であつたとすれば、西洋館の應接室などで……。」

花「其處です、若し貴下のお留守に、奥まつた室で會つて御覽なさい、直ぐに人から感付かれるが、應接や何かだと、別に人も疑らないと云ふ考へなんです……。」

義「して見ると、兒島と妻とで波江を惨殺したのだと有仰るん

ですわね。」

花「そうですね、兇行の當日に、奥さんと兒島と云ふ人が、
 應接で何か話してゐるのを、平常怪しいと感付いて居た波江が
 茶か何かを運んだ後、扉の外で立ち聞をしたものと思ひます、
 先刻お重と云ふ女中が、波江さんが跣んで居ましたと云ふので
 推して見てです……處が立ち聞されたと云ふ事を、二人が知
 つて、此の儘にして置いては露顯すると、云つて暇を出しては
 尙更ら危険だ、一層の事に殺して了はふと、茲に初めて殺意を
 生じたものでせう。それで二人が相談の結果、常に人から似て
 居ると云はれて居るのを幸ひに、貴下が寢室に居ると間もなく

奥さんは波江を呼びに来たものと思はれます、奥さんの足跟が
 此處にあるのが何よりの證據です、そして何等かの口實を設け
 波江を自分の室に寝かして、波江が眠るのを待つて、猛烈な魔
 酔劑を以て人事不省に陥らしめた上、奥さんが自分の指輪を波
 江に簞めさせ、着物も全然着せて、波江の着物を自分が着て、
 髪は態と分らぬ様に解ひたものと思ひいます、でなければ結ん
 でゐた髪が解けると云ふのは、一通りの藻掻き方ではありませ
 ん、それに少しも藻掻いた風も見えず、加之に、元結は鉄で切
 つたものです」

義「して顔面を抉つたのは……？」

花 大學では不明だと云ひ、深澤醫師は御承知の通り刃物で扶つたものと云つてゐましたが、是れは刃物で扶つたと云ふ、深澤醫師の診断は全然違つて居ます、寧ろ大學の不明と云ふ方が事實に近いでせう!!……。」

義『では貴下の御試験の結果は……?』

花『是れは印度の深山に産する毒草で、例の博覽會に來ましたボルネオ人と云ふ様な食人種が、此の毒草の汁を搾つて矢の根に付けて、獸を射る時には、例へ矢は立たないでも、當りさへすれば、其の獸は全身麻痺して斃れると云ふ、實に猛烈な毒を含む草の粉末に、更らに化學的の或る配劑と加工をしたもので

是れを人間や其他の動物に塗布する時は、其の部分だけが煙の如くに消へて、全く何物をも残さない、若し人間の體全體に瀉ぐ時は、其の體全部が消えて了ふと云ふ、世に怖る可き劇薬を以て、顔面の肉を奪つたものです……。」

義郎はブル／＼と身慄いした、

義『其麼薬が容易く得られますか。』

花『どうしまして、歐州文明國でも殆んど未だ絶無といつても宜いでせう』

義『そんなものを、どうして二人が持つてゐましたでせう……。』

義「兒島と云ふ人は、化學的の智識を有つては居ませんか……」
 義「有つて居ます、その研究の爲め獨逸に趣いたのです……」
 花「それで益々私の見込みは確かになつて來ました、貴下は
 先刻、兒島と云ふ人は、獨逸から印度に廻つて歸朝したと有仰
 いましたね……」

義「そうです……」

花「未だお察しが付きませんか、其の怖ろしき劇薬は、兒島と
 云ふ人が多分發明した、獨特のものだと思ひますがね……」

義「そうでせうか……」

義郎は眞蒼になつて、漸く自分の妻が、怖ろしき兇行をした

犯人と云ふ事が、判りかけたらしい面持となつた。

花「お待ちなさい、未だお目にかけるものがありますが……」
 云ひつゝ、花丸は、波江の行李を引掻き廻して居ると、着物の
 間から一葉の寫眞が出た手に取り上げて見ると、可愛らしい女
 の兒の寫眞で、裏には、フヂエ（四才）シヅエ（六ツ）と記しただ
 けで、其の他には何にも記してなかつた。

花「是れは誰れの寫眞でせう。」

義郎に渡した、義郎は手に取つて見てゐたが、

義「サア判りませぬね、何處か此の大きい方は、妻に眼許が似
 てる様にも思ひますが。」

花「暫く私に貸して下さる事は出来ませうか……。」

義「ハイ御入用でしたら……。」

花丸は寫眞をポケットに収めて、サア御主人、お目にかかるものがありますから……。」

今度は花丸が先に立つた。

「一七」 今度は貴下の番

△怖ろしい薬をかけられるのは△
△失望や嫉妬などが……。」

義郎は後から黙つて跟いて行くと、花丸は兇行のあつた室から、三ツ目の室の窓下で足を止め、

花「サア此の足跟を御覧なさい。」

義郎は花丸から顕微鏡を取つて見て居た。

花「ごうです、此處に印した、ごの寸法に符合するか量つて御覧なさい。」

更らに尺度を渡した、義郎は尺度で量つてゐたが、

義「貴下が妻の足跟と有仰つた、波江の室にあつたものと同一です……。」

花「さうでせう……其の足跟の跟は、此處に来て、空氣草履となつてゐますから御覧なさい……。」

義「成る程……。」

花「それから今度は是れを御覽なさい……男の靴の跟がありませう、手帳の其の次に記した寸法と同じでせう……。」

義「違いありません……。」

花「ぢや今度は此方にお入來なさい。」

植込みを逢ふて、西洋館の應接室に來た。

花「サア此處を仔細に見て御覽なさい、今の窓下で見た、靴の

跟と同一の跟が残つてゐる筈です……!!。」

云はる、儘に、殆んど這ふ様にして見てゐたが、

義「有ります〜。」

花「ありませう、此處に在る靴の跟は、兇行の當日、兒島と云

ふ人が、此處で奥さんと會見した時に穿いて來たものです、尙ほ私は一昨日、貴下方が食事して居られた間に、兒島と云ふ人の靴の寸法を量つて見ました……。」

義「同一でしたか……。」

義郎は言葉遽しく尋ねた。

花「そうです、寸分違ひませんでした……ママ彼室に行つてお

話し致しませう……。」

二人は以前の室に戻つた。

花「御主人ごうです、慘殺されたのは奥さんでなく、波江と云ふ事がお分りになりましたか……。」

義「有仰つた通りとすれば……」

花「私の推察では、彼の窓下までは、兒島と云ふ人が来て、奥さんが波江を惨殺して金庫から、盗み出した金を、二人で運んだものと思ひますが、貴下の御意見は……」

義郎は何麼事は考へて居る餘裕はなかつた、果して花丸名譽探偵が云ふ如であつたなら、世間に何として面向けが出来やう真逆そうではあるまい、而し今迄丸から説かれたいろ／＼の立證では、そうとしか思はれない事實とすれば、憎いのは綾子よりも兒島である。八裂きにしても足りない奴だと云ふ様な、失望や嫉妬などが、右往左往に頭の中を往來して、殆んど自分

を忘れるやうに掻き亂された。

義「今の場合、私としては何とも云へません。」

花「御尤もです……」

義「妻は兒島と一緒に居りませうか。」

花「サアそれです、其の迢の事は是れからの搜索の結果でないど、確かな事は申されません……」

義「……」

花「而し御主人、真相が明かになるまでは、どうかお誓ひになつた通り、絶対秘密に願います、又兒島と云ふ人が來ても、決して態度などで、覺られぬやうになさらないと、若し覺られでもし

たら、今度は貴下の番ですよ、怖ろしい薬をかけられるのは……」

義「エツ……」

義郎はブルブルと身慄ひした。

花「ア、それから、奥さんが居られたのは、新橋、何と云ふ家でしたか。」

義「吉野家です……」

花「兒島と云ふ人の宅は何方です……？」

義「久保余町の廿五番地です」

義郎の言葉は、聞き取れぬ程小さかつた。

花「ヤアどうも飛んだ失禮をしました。何れ搜索の模様はお知らせしますが、飽くまでも秘密にして、覺られぬ様に願ひますよ、高飛びでもされると大變ですからね。」

義「畏まりました……」

花丸の勞を謝する言葉も、腹には思つゝても、口に出す力とでもなく、花丸を玄關に送り出した。

花「ちやまた……」

簡單な言葉を殘して、心中大いに期する處があるもの、如く勇んで和田邸を去つた。

「二八」 不思議な寫眞……

△探偵はアツと驚いた……▽
△記した文字までが同一▽

花丸名譽探偵は、和田邸を去るが否や、直ぐ其の足で新橋の吉野家に遣つて來た。

花「御免下さい……。」

主婦「入來しやい……!!。」

出て來たのは、年頃四十格好の主婦、花丸の姿を見て、キョトンとした面をして居る。

花「鳥渡お尋ねしたい事があつて來ましたが……。」

主婦「ハイ……。」

花「外ぢやありませんが、駒込の和田さんの處へ退藉されて行つた、綾香と云ふ人の事に着いてお尋ねしたい事がありました……。」

主「アラそうですか、毎日新聞社の方や刑事さんがお出でになります、矢張貴郎もそうなんですか……。」

花「マアそう云つたものですが、彼の人が稼業をして居る時、兒島と云ふ馴染客がありやしませでしたか……。」

主婦「そうですね……。」

主婦は暫らく考へて居たが、

主婦「氣が付きませんねえ……。」

女「何ですつて、姐さん……。」

主婦「ないね、此の方が綾ちゃんの家に住た時分に、兒島と云ふ馴染客がなかつたかとお聞になるんだがちよつとねえ……。」

女「ア、姐さん、あるぢやないの、ほら内務省とかに出て居る人で、好い男があつてぢやありませんか、家にも来た事がありますよ、何でもいろ／＼話して見たら、自分と同じ處の者だつたつて、綾ちゃんか云つてたぢやありませんか……。」

主婦「ア、そう／＼彼の人かい、何でも獨逸に行つたとか云つて綾ちゃんか病氣にならうとした……。」

女「そうよ……。」

獨逸に行つたと云へば、確かにそれですが……、兒島何と云つたか知りませんか。」

主婦「サアそれは一寸分りませんが……其の人なら、綾ちゃんが忘れ行つた、寫眞の中にありますから、其の寫眞の裏に、名前が確書いてあつたと思ひますが……。」

主婦さんは起つて、筆筒の上から、菓子箱を持つて来て、いろんな寫眞を掴み出した。

主婦「オヤ何處に行つたらう……。」

女「あれ、直き分るわ、大變な高襟なだから……。」
年増の藝妓も手傳つて、其の寫眞を引つ掻き廻した。

主婦「のつた〜。」

「あつて如さん、ア、それ〜。」

主婦「此處に書いてあります……。」

花「ハハア、兒島健一ですか、いや分りました。」

主婦さんと女は、掴み出した寫眞を再び入れて居た。

花「アツ主婦、今の寫眞を一寸見せて下さい。」

主婦「是れですか……。」

花「否や其方の女の兒いです……。」

主婦「是れですか……。」

花「そうです……。」

主婦が差し出し、た一葉の寫眞を取り上げて、一眼見るより花丸名譽探偵はアツと驚ろいた。夫れも其の筈だ、其の寫眞は曾て和田邸の波江の部屋の、行李の中から出て來たものと、些ども變らぬもので、而かも裏に記した文字までが同一であつた。

花「是れは誰れの寫眞ですか。」

主婦「それですか、それは綾ちゃんか忘れて行つた寫眞ですが、其の大きいのは綾ちゃんで、小さい方が妹だと云てゐましたが。」

花「姉妹ですか……。」

主婦「エ、そうですつて……。」

花「此の妹つてのはどうしたでせう……。」

主婦「なんだか小さい時に両親に死に別れて、二人共深川の伯母さんと云ふのに引取られたが、綾ちゃんだけは芝小山町の山村つて家に貰はれたので、別れる時に撮したんだ相です……。」

花「ちや貴女の家には、其の山村と云ふ人の處から来たんですわ。」

主婦「エ、そうなんです……。」

「小山町は何番地です……。」

主婦「もう山村つて云ふ人は、其處には居ませんよ。」

花「何處に越しだせう。」

主婦「サア綾ちゃんやんが妾の家に來た翌年、行き方知れずなつたん

ですから……。」

花「フム……何歳の時來ました……。」

主婦「そうですね、もう十年ばかり前ですから、十五六だつたでせう、……。」

花「生れは何處でせう……。」

主婦「成田の不動様のある處だと云つてましたよ……。」

花「フム……兒島と云ふ男とは、餘程深い仲でしたか……。」

主婦「そりや先刻も云つた様に、獨逸に行つた當座は、病氣になる位でしたが、間もなく和田さんと云ふ宜い旦那がついたもんだから、兒島と云ふ人の事なんかケロリと忘れた様でしたが、

まあ酷い目に遭つたんですつてね。」

女だからお金の有る旦那に退籍されるのは厭だつてんですよ
オホ……。」

主婦「チエツ負け惜み云つてるよオホ……。」

花「どうでせう、四五日此の寫眞を貸して貰へますまいか……
私は斯う云ふものですが……。」

花丸は一葉の名刺を出した。

主婦「アツでは貴郎があのお有名な……マアそうですか、ごうも
失禮しました、御役に立ちましたら、ごうか御遠慮なくお持ち
下さいまし……。」

名刺を見ると、主婦は急に言葉から態度まで改めた。

花「否や却つて失禮しました、少し譯がありますから、私が來
た事は、新聞社のものには勿論、總ての人に秘密にして下さい
……。」

主婦「エ、もうそんな事は……。」

花「お邪魔しました……。」

主婦「お茶もあげませんで……。」

女「左様なら……。」

黄色い聲を後にして、花丸名譽探偵は、新橋の吉野家を後に
した。

「一九」 床の下に這込んだ男

△亭主殺しが出来たもんだ▽
△彼れを生かして置いちや▽

花丸探偵が、吉野家を訪れた夜、即ち和田邸に兇行のあつた三日目の十時にも近い頃、大久保余町の停留場で電車を下りた男がある。身にはゴツ／＼した木綿ものを着け、左りの横丁に這入つて、幾曲りかの角を曲り、偶ある板塀で圍まれた家の横に來て、四迢を見廻して居たが、人の氣ないを見澄し脊延びをして、板塀に手をかけるが否や、靜かに身を縮め、塀を跨いで内側にソツと下りて、キヨロ／＼眼を光らして居たが、ズル

／＼と床下に這ひ込んだ。此の家は开も如何なる人の家か、又床の下に這ひ込んだ男が何者であるか、讀者諸君は容易に推察する事が出来るであらふ。この板塀で圍まれた家こそ、和田義郎の友人、兒島健一の住居で、床の下に這ひ込んだ男こそ、探偵神と云はれた、花丸三郎なのである。

花丸は息を殺して、彼方此方と這ひ廻つて居ると、急に門内に靴の音がして、障子や襖を、開け閉てする音がしたが、間もなく花丸が忍んで居る、頭の上の室に這入つて來た。

男「寂しかつたろう……………」
慥かに聞いた事のある兒島の聲だ。

女「エ、何だかねえ……。」

男「ハ、ハ、それで能く亭主殺しが出来たもんだ。」

女「皆な貴郎のためよ……。」

男「どうも有り難ふムいます……頼みもしないに……。」

女「へん何とでも有仰いよ……そりやそうとどうでした……。」

男「大丈夫だ、而し大分力を落してる様だ……。」

女「矢張り妾と思つてるでせう……。」

男「ウム……。」

女「何を考へてるのさ……。」

男「どうも拙いな……。」

女「何がさ……。」

男「彼れを生かして置いちや……。」

女「どうして……。」

男「どうしてつて、彼れが生きてる間は、お前と一緒に居る事が出来んぢやないか、ごんなにお前が姿を變へて居ても、直ぐ知れるからな。」

女「だから高飛びしやうと云ふんぢやありませんか。」

男「今其麼危険な事が出来るか、彼れを殺付けても、東京に居る方が、燈臺下暗しで安心だ。而かも友人の間柄と云ふのだから、誰れ一人疑る者があるものか……。」

女「そうねえ、ぢや譯はないぢやありませんか……。」
男「殺るに譯はないが、忍び込むのに勝手は分らんから困るぢやないか。」

女「ぢや妾も一緒に行くわ……。」

男「お前が行きや大丈夫だ……殺ろう。」

女「何時行くの……?。」

男「そうだな、思ひ立つたが吉日だ、明日の晩にしようぢやないか……。」

女「今夜あたりは夢見が悪いでせうねえ……。」

男「戀と金程怖ろしいものはないさ……ハ、ハ、ハ、ハ。」

と小聲で笑つた。

『NIO』 青い塚から移した液體

△思はず立ちすくんだ▽
△塚を眺めてニツコリ▽

女「何時でせう……?。」

男「そうだな十時過ぎだろう……。」

女「フ、眞逆妾が生きてゐて、貴郎と斯うしてると云ふ事は、

夢にも知りませうまいね。」

男「ハ、ハ、ハ、ぢや寢てから宜い夢でも見やうか……。」

女「エ、……。」

暫らくは話聲が途切れて、床でも敷くやうな音がした。
 女「アラッ、妾先刻便所に行つて、手を洗つた儘戸締りを忘れ
 たわ……。」

男「ナアニ大丈夫だ……。」

女「宜いか知ら……。」

男「お前が来ない前だつて締めつこなしだから……。」

それから聞き取れないやうな、小さな聲でグドグド話をしてゐたが、間もなくそれすら絶へて了つた。花丸は未だ身動きだにしなければなかつた。やがて二人の躰の聲が聞へた。

十一時も過ぎて、十二時、一時も過ぎた。花丸は微かな星の

光で薄明るい庭の方へ這ひ出て、今しも椽から外に、片手を出さうとした時に、ヒヤリと手に解れたものがあつた。花丸は喫驚して手を引いたが、再び手を出して探ると、それはビール壘であつた。何だ馬鹿々々しいと思つたが、何を思つたか、其の壘を持つて庭に這ひ出て、見ると、恰かも手洗鉢の傍だ。花丸は持つて来たビール壘を、音のせぬ様に手洗鉢の水で内外を洗つた。そしてそれを懐に入れ、手洗鉢の水を雨戸の溝に流し、雨戸の板と板との間に爪をかける、やうにして、スウツと雨戸を開けて、中に這入り舊の様に閉め足音忍ばして彼方此方を見廻して居たが、小さな硝子戸棚の中に、青だの白だの、いろ

んな壇の列べてあるのを見出した。花丸は静かに忍び寄つて、手をかけて開けやうとしたが、錠がピンと下してある、今度はポケットから種々の鍵が、一纏めに結び付けたものを取り出して、あれか是れかと見てゐたが、其のうち一ツを取つて、ソツと入れて廻すと、カチンと小さな音がして開た。花丸は一々其の壇を手につけて透して居たが、其のうちの青い壇の栓を抜いて、懐中からビール壇を出して、素早くそれを移して了ひ、ビール壇には嚴重に栓をして、傍を見ると蒸溜水の罐がある。其の蓋を除て、青い壇を突込んで、以前這人つて居た位に水を入れ、舊の様に置いて錠を下し、今しも出やうとする途端、エヘ

ンと云ふ咳拂ひの聲がしたから、花丸は思はず立ちすくんだ。それから稍三十分も立つた儘、ジツと息を殺して居たが、別に起きて来る様子もないから、以前の様に雨戸をソツと開け、外に出て静かに閉めて、表門からヒラリと外に飛び出した。先刻程まで、疎らた見えた星影も、何時しか消えて、小さな雨はホツリ／＼と降り出した。偶と路次から出て来た赤犬が、齒を剝いて花丸に吠へついた。

花丸は一向頓着しないで、懐中のビール壇を取り出して、ニツコリ笑つた、开も花丸が青い壇から移した液體は何であらう……？

「二二」窓から忍んだ男女

△ピストルの引金を引いた時▽
△貴下の生命を取りに来た…▽

闇々と更けた夜の一時頃、曇つた空からは、今にも雨が降り
相で、瞬く星の影もなく、實に一寸先は暗とは此の事か、其の
真夜半に、駒込千駄木林町の、和田邸の裏手、雑木藪から、足
音忍ばして現はれた男女の二人がある。男は洋服を着て、女は
裾を端折つて覆面をしてゐる。

聽て二人は、和田邸の湯殿の後に忍び寄つて、女は白い手を
伸し、窓に手をかけてソツと硝子戸を外し、女が先にスルリと

這入ると後から男も無言で這入つた。先に立つた女は、餘程此
の家の勝手を知つて居るものと云ふ事は、窓の硝子戸を外した
一事でも知る事が出来る。

二人が忍び込むと間もなく、今度は黒い和服を着た男が、外
された窓から中を覗いて居たが、これも同じくスル／＼と這入
つた。そうして其處邊を手探つて居たが、箱風呂の蓋を取つて
静かに窓に押し當て、袂から細引を出して、窓の兩端の釘から
釘にかけ、其の蓋が一寸に除ね様にして、廊下に来て透して
居たが、殆んど這ふやうに、廊下を傳はつて、忍んだ二人の後
を跟けた。

先に忍んだ男女は、廊下の處々には、五燭燈が點いて居るし、それに兩側の室々から、洩れて来る雷燈の明りに、難なく一室に忍び寄つた。中からは大きな男の躰に交つて、スウ〜子供こどもの寢息が洩れて来る。二人は面見合はして居たが、互ひに領つうなき合つて、女が襖の引手に手を掛けて、スウツと音のせぬ様に開けると、中には電燈の光を薄くするため、珠には青い紙が被せてある。其の青い光の下に、前後も知らず寢て居るのは、主人の義郎父子である。

男女は顔見合はしてニッコリ笑つた。聽て男はポケットから、小さな壘を取り出し、足爪立て、義郎の枕許に忍び寄つて

壘の栓を除つて、凡そ二分間ばかりも鼻先に持つて行つたが、今度は其の液體を、義郎の左の頬にダラ〜と流しかけた。女は入口に立つて見て居たが、男は壘の中なかのものを、全部流しかけたが、別に自分の期した反應が現はれぬので、オヤ〜と云ふ態度、此の時後から忍んだ男は、

△「曲者ツ……。」

と云ひ様、入り口に立つて居た女を、室の中に突き倒した。

女「アレツ……。」

と云ひ様、寢て居た義郎の上に倒れた。

義郎は、

義「誰れだつ……。」

と跳ね起きた。

男「失敗たつ……。」

男は逃げやうとすると、入り口に立ち張かつた男が、

△「天網怪々疎にして洩さんやだ、花丸三郎だ、逃げ得るもの

なら逃げて見い……」

和田さん、御用心なさい、曲者ですぞ……。」

義「花丸さんですか……。」

男は逃れぬものと思つたか、ポケットから銀磨きのピストルを出して、今引金を引いた時、早くも花丸は飛び付いたから、

弾丸は向ふの壁に當つた。必死になつて振り放さうとするが、花丸は弘道館で練つた腕だ。

花「生意氣な事をするなつ……畜生つ……天は悪事に興せんぞ……。」

忽ち其處に捻ぢ倒した。此の時女はバタ／＼逃げやうとするから……。」

花「和田さん、女を捉へて……女を……。」

何が何だか譯が分らず、呆然して居た義郎は、

義「ハイ……。」

と云ひ様、逃げやうとする女を引き倒した、花丸は見るく

男を縛り上げて。

花「サア逃げられたら逃げて見い……。」

片足上げてボンと蹴倒したが、両手を後に廻して縛られて居るから、倒れた儘で起きれない。

花「今度は此奴だ……。」

義郎が引倒して押へ付けて居る、女の襟髪をグイと取つて引き起し、是れも両手を後で縛つた。

花「ハ、ハ、ハ、驚ろいたでせう……。」

義「一體此奴等はどうしたんです……。」

二人の子供も、此の騒ぎに起き上つて、眼ばかりキヨロク

さして居る。

「此奴等ですか、此奴等は貴下の生命を奪りに來たんですぞ……。」

義「エッ私の……。」

花「そうです、波江を殺して奥さんを見せかけたのも、金庫の金を盗んだのも、皆な此の二人です、獸心の面を見せて上げます……。」

花丸が電球の青紙を除ると、廿四燭の電燈は晝を欺むくばかりに、バツと室内を照した。

花「先づ此の不貞腐れから御覽なさい……。」

被つて居た覆面を除る。

義「お前はッ……。」

と、義郎は二の句が次げなかつた。

「二二」 妹と知らずに殺しました

△善の結果は善。悪の結果は悪▽
△悪の榮えた例はないからな……▽

義郎が二の句が次げなかつたのも無理はない。其の女こそ、自分が新橋の花園から、手折つて来た、自分一人の花と思つて居た、過ぐる日、惨殺された筈の、妻の綾子であつたからだ。

花「サア和田さん、今度は此奴を御覽なさい……。」

向ふ向きに倒れて居た男を引き起した。而し此の時は義郎も何者かを察して居たので、綾子の時程驚ろかなかつた。

義「兒島君、淺間しい事をして呉れたね。」

義郎の聲は沈痛であつた。

兒實に申譯はない……。」

花丸は綾子の肩に手をかけて、

花「オイ、貴様は怪しい劇薬で、波江を殺したろう……。」

綾子はワツと泣き出した。

「泣くだけの良心があつたら、何故早く夢を覺さんか……此の寫眞は見覺へがあるだらうな……。」

云はれて綾子は、涙に濕んだ眼を上げ一眼見て、

綾「それは妾が……。」

「吉野家に忘れて来た、貴様の幼ない時の寫真だろう……。」

綾「ハ……ハイ……。」

花「ぢや是れは……。」

綾「アレそれは……。」

花「是れは貴様が殺した、波江が持つて居た寫真だが、何か思ひ當る事はないか……。」

綾「エツ……あの波江が……波江が……わ……妾は妹と知らずに殺しましたつ……。」

ワツと正體もなく泣き崩れた。

義「エツ波江が妹つ……。」

義郎も今更ら驚ろいたが、堪へられなくなつたものか夜具の上うへに突伏して頭を抱へた。

花丸は一種哀れみを帯びた調子で。

花「悪あくの報むくひはそう云ふものだ……。」

今度は兒島に向つて。

花「オイ色男、昨夜の話ぢや、和田さんが夢見ゆめみが悪わるかろうと云つて居たが、今夜から貴様達の、斷頭臺だんとうだいの夢見ゆめみなんか、餘あままり宜よろいものでもあるまいナ……どうぞ、今夜の劇薬げきやくの効力きりかは

大正四年十二月八日印刷
太正四年十二月十七日發行

化學の犯罪

〔正價金拾五錢〕
〔郵税金四錢〕

著………作
所………有

著作者 樋口紅陽
發行者 山崎曉三郎
印刷者 岡部碩之

國華堂印刷部

發行所

東京市淺草區瓦町二十八番地
國華堂書店

振替(東京)一〇七三五番

□東天紅先生著

□發行所

東京市淺草區
瓦町廿八番地

國華堂書店

□秘密文庫 第一號 **黑焦の屍體**

□定價金拾五錢□
□郵税金四錢□

東京神田錦町の一角に一夜怪しき猛火が襲ふて、其の火元を調べて見た處、一家は何者かの爲めに慘殺され、其の主人が強慾無比の行ひをして十年間に積んだ不義の富は奪ひ去られてゐた。茲に當代無比と稱せられた名探偵は、之が檢舉に大活動を開始する。すると此の犯人は兇惡無類の大賊で警察を見ること恰かも子供の如く、或は探偵を擒兒に爲し或は警察に脅喝状を送り或は表札を建て、市民を煽動する等其の辛辣にして極惡なること言語に絶す。其の間を潜り抜けて身或は乞食となり又は賊寨の地下室に瀕死の苦境を越して剛毅沈着、遂に偉大なる計略を以て兇賊の首魁を捕縛するのである。中には變裝競争も出る。自動車の追跡も出る。短銃の格闘も出る。殆んど人間業とも思はれない探偵實談。

樋口紅陽先生著 □發行所(東京市淺草區)國華堂書店

探偵文庫 第一號 生首小包

□定價金拾五錢□
□郵税金四錢□

東京麴町區三番町、立浪伯爵宛てに送られた、腐爛したる女の生首一個。是れ伯爵に恨みを含める者の悪戯……？、或ひは伯爵の影に、黒い秘密が潜んで居るが。敏腕を以て聞へた山室探偵が、僅かに一個の指環と、二本の金歯を手掛りとして、事に六年間の苦心の後、漸く事件を明かにす。其の間の波瀾重疊は、諸君一讀して始めて快哉を叫ぶべし。

樋口紅陽先生著 □發行所(東京市淺草區)國華堂書店

探偵文庫 第二號 魔、醉劑

□定價金拾五錢□
□郵税金四錢□

百五十萬圓の財産家浦鹽漁業會社々長春野善三郎が、浦鹽よりの歸路、敦賀より行衛不明になりし事件より始まり。探偵狂人といはれた、松田勝元と云ふ、警視廳より名譽探偵の待遇を受けた辯護士の活動となり。續いて善三郎の夫人、令嬢も悪漢に奪はれた事件は益々迷宮に入るの時、一枚のハンカチーフに移れる薫によりて、東京科大學の花精魔醉劑の紛失を發見し此の事件は鮮明されると云ふ。此の間花の如き美人あり、勇ましき少年あり、伶俐なる愛犬ありて、興味は宛然湧くか如し。

樋口紅陽先生著

發行所(東京市淺草區)國華堂書店

探偵文庫 第三號 化學の犯罪

定價金拾五錢

郵税金四錢

化學的智識を有する惡漢は、印度より持ち歸りたる玄妙不可思議の藥品を以て、或は人間を煙の如く消えしめ、或ひは顔面の相格を變せしめて犯罪を湮滅せんとせしも、より以上に化學の智識を有する探偵ありて、遂ひに惡漢を捕縛すると云ふ、奇々怪々の物語である。

樋口紅陽先生著

發行所(東京市淺草區)國華堂書店

探偵文庫 第四號 短刀一本

定價金拾五錢

郵税金四錢

短刀一本……是れ東京市民は勿論、聞へ人をして戰慄せしめた、小石川七人殺の現場にて発見したものであるが、此の血塗られたる一本の短刀によつて、刑事は如何なる苦心を爲し、如何なる危険を冒して犯人を擧げたるか、一讀諸君は、血湧き肉躍るの概あるべし。

樋口紅陽先生著

發行所(東京市淺草區)國華堂書店

探偵文庫 第五號 死人の犯罪

定價金拾五錢
郵税金四錢

死人の犯罪とは何………?

諸君はそんな事があるものか、死んだものが罪を犯すなんてと、一言の下に貶すかも知れないが、事實だから不思議であると云つて怪談や何かではない。兎に角一讀すれば、成る程と分るであらう。其の分るまでの波瀾や曲折は、諸君が拳を握る事もあらふし、満腔の同情を拂ふ少年もあらふし、慘忍なる繼母を憎む事もあらうし、機敏なる、勇ましき、復讐的氣分を含める、年少探偵の奇計には、諸君快哉を叫ぶであらう。

278
484

終

